Sustainable Community Business

サスティナブル・コミュニティビジネス

— 震災復興型社会起業家育成塾・フラスコイノベーションスクールの軌跡 —

サスティナブル・コミュニティビジネス

― 震災復興型社会起業家育成塾・フラスコイノベーションスクールの軌跡 ―

志の連鎖と優しさが地域を輝かせる

2011年3月11日、東日本大震災が発生。その約5ヵ月後、東北のソーシャルビジネスの牽引者であった加藤哲夫氏（特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター創設者）が息をひきとった。

加藤氏の残したメッセージは、「定評ある塾を開講し、志ある人材を育て、新しい郷（くに）づくりの先頭に立たせる」ことであった。その遺志を引き継ぐ形で、フラスコイノベーションスクールは開講された。

2011年12月、加藤氏の逝去後、東北ソーシャルビジネス推進協議会の代表を加藤氏から引き継いだ風見正三氏を講師に「フラスコSBCBセミナー」を2回連続講座として開催。これをきっかけに、風見氏を中心とするソーシャルビジネスの講座を企画。それが「フラスコイノベーションスクール」である。スクールは2012年7月に開講。2012年度は仙台市委託事業として開催。2013年度、2014年度は世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP日本委員会）の支援を受けて実施。2015年5月の最終講義までに、100名の受講生を受け入れることができた。

震災復興過程で注目を集めたソーシャルビジネス、社会起業家。フラスコイノベーションスクールは、ソーシャルビジネスによる社会起業家育成スクールの震災後の最初期のものであり、起業支援金制度を伴わないスクールであったことに特徴がある。

本書のタイトルである「サスティナブル・コミュニティビジネス」は、風見氏が講義で語り続けてきた東北の目指すべきビジョンであり、地域に根ざした持続可能な地域モデルの実践こそが東北再生の方途であることを説いてきた。本書はその受講生達の奮闘記である。紙面の都合上全員を掲載することは叶わず、また第3期の石巻スクールは最終講義を終えたばかりであるが、2012年度の第1期生を中心に20名のフラスコの志士の奮闘をレポートしている。

フラスコイノベーションスクール

CHAPTER 1　ＦＩＳ発 社会起業家事例集

CATEGORY			
	コミュニティ	タガの柵 代表　松村正子 さん	06
	デザイン	heptagram 代表　石川洋平 さん	08
	コミュニティ	カフェつぶっこ 代表　佐藤真紀 さん	10
	コミュニティ	特定非営利活動法人ガーネットみやぎ 理事長　小笠原直美 さん	12
	ツーリズム	一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ 理事長　津川登昭 さん	14
	文化	一般社団法人梅部 代表理事　中野由美 さん	16
	環境	NPOこよみのあしおと 代表　久保田 歩 さん	18
	教育	(株)オンサイト 代表取締役　砂金よしひろ さん	20
	福祉	一般社団法人ぶれいんゆにーくす 代表理事　伊藤あづさ さん	22
	文化	伊達政宗公姫「五郎八」倶楽部 事務局長　佐藤康子 さん	24
	Ｉターン	バルーンアーティスト　飯田淳毅 さん	26
	IT 支援	東北大学大学院工学研究科 博士後期課程　田中康基 さん	28
	文化	書家　有地和子 さん	30
	農業	農家　鎌田大地 さん	32
	環境	亘理地区まちづくり協議会・環境衛生推進部会　横山憲治 さん	34
	まちづくり	一般社団法人ふらっとーほく　阿部結悟 さん	36
	まちづくり	一般社団法人ふらっとーほく（当時）　細田幸恵 さん	38
	文化	一般社団法人日本漆総合研究所　蜂谷哲平 さん	40
	Ｉターン	石巻市６次産業化・地産地消推進センター　森 優真 さん	42
	漁業	漁師　豊嶋 純 さん	44

CHAPTER 2 対談 1
宮城治男（NPO法人ETIC. 代表理事）×風見正三（フラスコイノベーションスクール総合プロデューサー） 46

CHAPTER 3 対談 2
川村志厚（経営デザイン研究所代表）×小川真美（NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター） 52

CHAPTER 4 おわりに
風見正三（宮城大学事業構想学部 教授 フラスコイノベーションスクール総合プロデューサー ） 56

CHAPTER 5 論考
東北におけるソーシャルビジネス・プラットフォームの形成動向 58
～東北ソーシャルビジネス推進協議会とせんだい・みやぎＮＰＯセンターの取り組みを中心に～
佐々木秀之（NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター）

講師一覧 70

「多賀城と言えば、三大史跡だよね」と言わせたい。

タガの柵（たがのき）代表　松村正子 さん

2012 年 PART1、2013 年 PART2 受講

就職・震災・帰省

生まれも育ちも多賀城市。大学時代はアメリカで過ごし、東京で就職。エンジニアとして約 5 年を東京で過ごした。

東京での生活で感じたことは「何かが違う」。親の老後も考えた。そんなとき、実家が震災に。自分のやれること、やりたいことは何か？自分の人生を見つめなおし、2012 年 8 月、生まれ育った多賀城市へ。

フラスコスクールとの出会い

故郷へ帰り、考えたこと。「自分の生まれ育ったまちを知りたい」。

歴史資源あふれる多賀城市。震災を乗り越え、地道に、でもいいモノを作っているヒト達がいる。でも、それを知る人は少ない。それを知らせる方法も、少ない。「みんな「必要だね」って言うけれど…」。でも何から手をつければよいのか？

暗中模索のなか、たまたま目にとまったチラシをみて、フラスコイノベーションスクール、オープンセミナーへ（対談、風見正三氏×木下斉氏）。この場でフラスコイノベーションスクール第 3 期への参加を決めた。

出会いと気付き、そして実践へ

フラスコイノベーションスクールで見つけたもの、踏み出す勇気。気づいたこと、自分の故郷への想い。得られたもの、志のある仲間たちとの出会い。自分の想いをかたちにすること、見えてきたこと、市民も知らない多賀城市の魅力を集め、発信すること。どんな方法で？仲間や講師陣が与えてくれたヒント。地域の魅力発信拠点をつくる。途中何度も悩んだ。スクールの受講者やスタッフにも何度も相談した。

「何のために多賀城に戻ったのか」、「今やらなければ後悔する」。覚悟を決めた。

開業

試行錯誤しながら、コミュニティカフェの開設へ向けて準備。「多賀城の歴史資源を活かしたい」。とはいえ、多賀城は史跡。城といっ

多賀城市に多く残る「板倉」をイメージしたプランター

多賀城関連の書籍を並べた「タガの柵文庫」

店内を彩る多賀城の史跡のモチーフ

ても残っているのは「礎石」程度。観光に来る人の中には「天守閣」を想像してくる人も多い。多賀城は奈良・平安時代に「遠の朝廷」と呼ばれた城柵（政治・軍事の中心的な役所）ということを少しでも知ってもらいたくて、店名は「タガの柵」にした。

店舗レイアウトやロゴは、フラスコスクール同様、仙台市委託事業として開催されていた「とうほくあきんどでざいん塾」に相談した。決定したデザイナーは、偶然にも、フラスコスクールのパンフレットの作成者だった。

店舗には、市内で200年以上続いた古民家の床板、神棚の材料を活用。多賀城に多く残る「板倉」をイメージしたプランターも設置した。そして、2014年8月、コミュニティスペース「タガの柵」をついに開店。

夢と展望、思い描く未来

観光拠点として、すこしづつ地域の魅力も集まってきた。歴史資源、地元の事業者・市民活動家、古代米、大和野菜。東北に一台しかない焙煎機を持つ珈琲豆屋さんも見つけた。コラボレーションで「多賀城古碑（たがじょうコーヒー）」を提供。ガイドツアーも定期的に実施している。

食を提供しておもてなしをするというのが、ここのOPENの理由ではないけれど、要望に答えてスイーツセットも開発。古代米の米ぬかを利用した。コミュニティビジネスの実践の第一歩。多賀城で何かしたい、というメンバーも増えてきた。メンバーが企画を持ち寄ってくるようになった。ツアーコンシェルジュとしての道も見えてきた。

地元が好き、人が好き、旅が好き。目標を定めた。「旅行雑誌に多賀城がない」。2010年はあった、それを復活させたい。気仙沼、三陸、塩釜は復興特集を組まれるが地元がとりあげられることはない。日本三大史跡は、奈良の平城京と 福岡の太宰府、そしてここ、多賀城。近い未来、「多賀城と言えば、日本三大史跡だよね」と言わせたい。松村正子さんの夢は、尽きない。

［タガの柵］

●所在地

宮城県多賀城市山王字千刈田 6-3

●営業時間

10:00-16:00 (カフェ・観光案内)

※ラストオーダー 15:30

(閉店後貸切利用可能)

●定休日

水曜日 (祝日の場合は営業翌日振替)

● WEB サイト

http://taganoki.wix.com/home

震災後、「新しいシステム」を見るために

heptagram 代表　石川洋平 さん

ヘプタグラム

2012 年 PART1 受講

アフリカから日本へ

愛知県岡崎市生まれ。東京の美術大学を卒業し、海外青年協力隊としてモザンビークへ。震災をきっかけに宮城へ。「七ヶ浜でカフェをやりたい」という先輩の夢を手伝うためにご当地へ。さまざまな出会いがあった。NPO の立ち上げ、伝統工芸の手漉き和紙、夜を徹して盛り上がったビーチフェス。自然と、自分のできることが定まってきた。

「自分という身体」で社会実験を

自問、なぜアフリカから宮城へ流れたか？熱帯のモザンビークで震災のニュースを見た。社会の転換期と肌が感じた。ならば、自身がその一部となってその変化に関わろうと。手法は、関係性のデザイン＝コミュニケーション。自分の身体と、カラダ以外との関係性。コミュニケーションとは何か？地元の人々と NPO を発足し、まちづくりやワークショップを行いながら、その解を探していく。

フラスコへ。経営学との出会い

先輩の紹介で、フラスコイノベーションスクールへ。経営学との初めての出会い。概論が多かったようにも感じるが、そこでの出会いや気付きが、自分の生業へと導いていく。

まちづくりにひと区切りをつけ始めたの

は、ロゴ制作などのグラフィックデザインやシルクスクリーン、Tシャツなどの製作を飲食店・漁師・企業などから受注し、生計を立てること。地域の経済圏に自分の作品を「商品」として関わらせることで、ひとつの解を見つけ出そうとした。

旅は続くのか、留まるのか

宮城に来て２年と少し。また海外に行こうとも考えている。その後は？七ヶ浜を出て行くかもしれないしずっといるかもしれない。 少なくとも今ここにいるのは、ある種の必然があったからと感じている。

周りの起業家から仕事をもらいながら日々を過ごす。受けているのは小さな仕事だが、オルタナティブな生き方である、と言えるかもしれない。いま何をすべきか？常にインスピレーションを感じ行動する。石川洋平さんの永い旅路は、まだ始まったばかり。

制作したリーフレット
（南三陸町農漁家レストラン慶明丸）

制作したイベントパンフレット

「あの人ができるなら、私にもできる」と、みんな思うはず。

カフェつぶっこ 代表　佐藤真紀 さん

2012 年 PART1 受講

父の転勤、結婚、生きることへの自問自答。

神奈川県横浜市生まれ。父は転勤族、東京・青森・秋田・福島と引っ越しながら生きてきた。福島で夫と出会い、結婚。夫も転勤族（栃木・岩手・宮城）。そこからはただ懸命に 4 人の子供を育て上げるうち、気がつけば仙台に身を置いていた。

子供から手が離れ、気づいたこと、考えたこと。自分の居場所は？生きがいは？やりたいことは？何かをしたい。いろいろな夢がふくらんできた。

ソーシャルビジネス（コミュニティビジネス）との出会い

社会活動とはなんだろうか、自分がやれることは何があるか。地域で行うボランティアのような活動を「小さなお金を循環させる＝ソーシャルビジネス（コミュニティビジネス）」と呼ばれる方法があるらしい。

教えてくれたのは、風見教授、フラスコイノベーションスクール。学びの場を模索しているうちに見つけた、自己実現のステージ。自分の考えをビジネスモデルにまとめたいけ

焼きシフォンケーキとコーヒーの詰め合わせギフト

焼きたてが提供される自家製パン

ど、パワーポイントは使えない。代わりに作った紙芝居が好評。やればできる、為せば成る。

できることから始める。コミュニティカフェの開業

自分ができること、やりたいことは。どうやって生きていくか。ソーシャルビジネス＝地域の課題解決、自分にとってはどの地域か。夫の実家、宮城県丸森町大張地区、そこは震災後風評被害で悩みを抱える。ならばいっそ、そこでカフェを開業してしまおう。『大張盛り上げ隊』を結成。帰るならば改装しなければならない。ならばいっそ、カフェにしてしまおうか。そこで明るく暮らす、そんな姿を自分の子どもや若い人に発信したい。

無理せず、自分のできることから。自分を見て「私にもできるかも」とみんなに感じてもらえれば良い。得意技、パンづくり、チョコレートケーキ。チョコレートケーキは幼少の頃、ミセスキスラーとの思い出の味。オーブン前にアメリカに手紙を出し、レシピをもらい。思い出の味に近づけていった。美味しい珈琲豆も調達できる。そう、できることから無理なく、まずは始めてみる。

恥ずかしがっていたら、なにもできない。

「ここには何もない」と言うけれど、地元には宝物がいっぱいある。県内産米粉・国産小麦・地場産六穀でパンをつくる。六穀米を原料に用いた焼きシフォンケーキは『もりもり特産品大賞』のグランプリに耀いた！

地域の課題は山積み。でも、諦めないで自分を信じて。学びながら、楽しんでいる自分の姿を、子どもたちに、全国に、世界に発信していきたい。佐藤真紀さんは、悩みながら迷いながら、まっすぐ我が道を進む。

［カフェつぶっこ］
●所在地
宮城県伊具郡丸森町大張川張字福岡 62
●営業時間
9:00-18:00
●定休日
水曜日、木曜日
● WEB サイト
http://blog.canpan.info/tubutuko/

震災で、もらった元気。黒子に徹して「協働の種まき」を。

特定非営利活動法人ガーネットみやぎ 理事長
小笠原直美 さん

2012 年 PART1 受講

上京・帰郷、迷い、震災・復帰

宮城県村田町在住。学校卒業後に上京、飲食店経営会社に勤めた。帰郷、人生への迷い。模索の日々のなか、震災。社会の変換点、自身の人生が大きく転換する。震災前は体調を崩し、数年過ごした昼夜逆転の生活。

２週間近く立ち止まったライフライン。震災直後の車中生活。日の出の起床・日暮れに就寝を繰り返した一週間、立ち止まっていた人生が、また歩き出す。

震災がくれた元気。
見つけた、自分の役割

お金はないけど、エネルギーと時間はあった。まずは動き出す。できることから始めよう。ネットで見つけた「村田町の親戚の無事を確認したい」の書き込み。町内の安否確認、当時はガソリン不足、自転車で町内を駆け巡る。見えてきた、社会での自分の役割、やるべきこと。

NPO 法人ガーネットみやぎ２周年活動報告会

蔵のまち 村田町で実施した石巻の海産物を使ったイベントの様子

自分のまわりの、地域の課題はなにか？物資が足りない、県外の人は物資を送りたくても、行政は個人からの物資を受け取れない。自分が団体をつくり、受け取って配ればいい。何が必要か、届けながら聞けばいい。全国へ情報を開示して、物資を受け取る。県外と地元の架け橋を、自分たちがつくる。

市民団体設立。少しずつ甦る、活気と元気

休養時代のネット仲間が救援物資や支援金を送ってくれた。これを正しく使わなければ。まずは作業着とガソリンを購入した。2011年3月末、任意団体『ガーネットみやぎ』を設立。「実りの象徴」の意。

一日2〜30箱と、予想以上の物資が届く。仕分けと配送をしながら不足物を聞き込む。やがて気付かされた、不足してるのは「モノ」だけじゃない。喜ばれたのは「カラオケ大会」、自分もみんなも元気になった。少しずつだけど、笑顔が、活気が、甦りつつある。石巻の長面浦で見つけたこと、あんなに美味しいムール貝が捨てられている。でも、漁業者は生産で手一杯。ならば自分が売り歩こう。またひとつ見つけた、自分の役割。

活動のシフト、協働のコーディネート、自分の未来

そして、活動が「モノ」から「コト」へシフトする。県外の団体や企業を被災地へ案内し、地元と交流する研修事業など、コーディネイト役を担うことに。

フラスコイノベーションスクールでも多くの気付きがあった。『ガーネットみやぎ』を法人化した。やがて、ほかの団体との協働も増える。隣の町ではじめた「山元の未来への種まき会議」。行政・企業・団体・住民の垣根を越え集い合い、定期的な話し合いをする。地元の村田町でも始めた。議論を繰り返し、行動につなげる、人をつなげる。

今後の夢、例えばホスピス、例えばDV加害者の再生プログラムなど、社会の課題を解決していきたい。昨年結婚し、いまはお腹に新しい命がある。母になっても、社会起業家として、自分のペースで社会と向き合っていきたい。

※取材後の 2015 年 3 月 2 日に元気な男の子が誕生しました。どうぞお幸せに。

［特定非営利活動法人ガーネットみやぎ］
●所在地
宮城県柴田郡村田町大字村田
字針生前 19 番地
● WEB サイト
http://garnet-m.net/

牡蠣船から見た景色、降りてきたキーワード。『湾』の演出家に。

一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ 理事長
津川登昭 さん

2012 年 PART1 受講

上京から帰郷。家庭の充実→震災へ

塩竈市出身、多賀城市在住。大学卒業後、東京に本社を置く会社にて仙台支社勤務。やがて東京や四国へ転勤し博物館の開発などを行ってきた。６年の月日が流れ、原点回帰、帰郷。

宮城に帰り、遠距離恋愛を実らせ、子宝にも恵まれる。妻、息子と娘、家族四人の幸せな毎日。仙台の広告会社で淡々とイベントや展示の仕事を続けてきた。そんななか、社会を見つめ直すきっかけが訪れる。2011 年３月、震災。

未曾有の大地震で生活が止まり、久々に地元をじっくり見ることになる。常々、故郷の塩竈のために、居住地の多賀城のために何かやりたいと考えながら、それぞれの地域を別々に考えていた。

活動風景

見つめなおした、故郷の歴史文化

震災直後、牡蠣漁師である友人の船で壊れた牡蠣棚を見に松島湾の真ん中に出た。そこから眺めた景色は、それまで別々に見ていた２つの地域が、自分の中でつながった。それ

以上に塩竈も多賀城も、そして七ヶ浜、浜田、松島、東松島も、同じ湾の兄弟のように感じることができた。

湾域の歴史を調べてみると、湾全域が日本で一番最初の製塩文化圏であることが分かった。なおさら湾域の連携が新しい力を生むことを確信していった。

海鮮藻塩丼

湾景

夢のはじまり、『湾の駅構想』地域の演出家に

『湾』という、キーワードが降りてきた。歴史・文化・人・食・風景の魅力を再認識し、自慢するためにツアーを開催。その中の仲卸ツアーがやがて飲食店の研修や学会のエクスカーションへ発展。ツアーのために開発した『海鮮藻塩丼』は、藻塩とスダチの味が大好評。

次第に、地域を自慢することを法人化できないか考え始める。フラスコイノベーションスクールにて、ソーシャルビジネスの先駆的な事例を多く学び、一般社団法人チガノウラカゼコミュニティを設立。地域自慢の拠点として『湾の駅』構想を提唱。湾の駅の機能は「製塩文化を伝える」「湾の産品を売る」「湾コミュニティ」の拠点とし、地域の誇りの継承を目指す。

現在、多くの仲間たちと『つながる湾プロジェクト』を結成し、湾域の歴史文化を学ぶ『チーム湾勉強会』などを開催中。まずは自分らが地域の魅力を味わい、その喜びが子どもたちへ連鎖していくことを願っている。津川登昭さんの航海は、果てなく続く。

［一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ］

●所在地

宮城県多賀城市城南 1-15-25

● WEB サイト

http://www.chigakaze.net/

歴史・伝統を受け継ぐ、新たなまちづくりの拠点を目指して

一般社団法人梅部 代表理事　中野由美 さん

2012 年 PART2 受講

海外へ・アイデンティティロスト・帰国

宮城県塩竈市出身。いつからか海外に憧れて、アメリカで、ホームステイ。その後、ワーキングホリディ・ビジネスビザを取得し、オーストラリアで仕事探し。1995 年、シドニーから帰国。

アメリカで閉鎖的な地元を離れ、海外で開放的な場所で暮らしたいと考えていた。しかし、海外生活の中で、自由で気楽なのは海外より日本ではないかと、そう思い始めた。自分の中で基本的な問題点を解決していない。閉鎖性への対立、自己の確立、アイデンティティ・ロスト。

日本文化への気付き

帰国後、海外生活の経験を活かし、仙台で派遣のツアー添乗員を生業とした。33 カ国・54 都市を巡った。その後、仙台の日本料理店で働く。そこで日本文化を見つめ直した。海外にいたからこそみえてきた、日本の伝統文化の良さ。自然と進む方向がみえてきた。煎茶道へも入門した。茶道から人生哲学を学んだ。やがて、アジアの他国文化にも興味を持ち、タイ好きのコミュニティをつくろうとタイ語教室を始めた。ご当地の伝統料理、トムヤムクン風味の芋煮会は大好評、日本とタイの伝統食文化が融合した。自分の役割、アイデンティティが見えてきた。和文化を気軽に楽しめるコミュニティをつくりたい。

震災・日本人のアイデンティティ

2011 年 3 月、震災。自粛ムードの中、自分のできることは何かを考えた。東北人の秩序立った行動が世界から評価されたが、そうした行動は「自分たちにとって当たり前のこと」だった。海外で感じていたことを思い出した、日本人のアイデンティティ、これを発信することにより何らかの活動に結び付けられないか。2012 年 3 月、仙台の中心部の小道に、和雑貨や小料理を出すお店『梅らぶ』を開業した。

県の起業家コースに学んだ、フラスコイノベーションスクールに出会った。社会性のある、自分だけのビジネスモデルを組み立てて、模擬プレゼンを行った。これこそが自分のやれること、やりたいことだと確信した。

法人設立、事業で震災復興

復興のためにできること、仮設住宅などのお母さんがたと帯を縫っている。素材はアフリカのフェアトレード生地を使い、クラウドファンディングにも挑戦した。

2014 年 2 月に法人化した。法人名は『梅部』。梅は縁起物であり、一年の最初に咲く花。その艶やかさと淑やかさが自分の活動主旨に合っていると感じた。和文化を活かした国際交流の場、文化の発信と学びの場、旅好きコミュニティの場、そう、『場づくり』が自分の役割である。

現在の事業は、2015年 10月により本格的に開始したリサイクル着物販売を中心に、レンタル着物の着付け、和装婚、和文化・国際イベントのプロデュースも行う。そのほか、着付け教室とタイ語の教室は 2012 年 3 月のオープン時から継続している。

若い世代に仙台でも和文化に親しんでもらいたい。『伊達着物衆』を発足した。着物男子でファッションリーダーを育てる。アミューズメント性のある和文化を東北発・仙台発で発信していきたい。

着物男子の様子

プロデュースした和装婚の様子

［梅らぶ］
●所在地
宮城県仙台市青葉区一番町 4 丁目 5-41
●営業時間
13:00-21:00
●定休日
日曜日
● WEB サイト
http://umeluv.wix.com/home

暦（こよみ）どおりの暮らしを見つめて

NPOこよみのあしおと 代表　久保田 歩 さん

2012 年 PART 1 受講

環境・生物多様性・４つの危機

宮城県仙台市出身。東京の大学で工学を学び、仙台の環境調査企業へ就職。５年目に生物多様性の調査を始めたことをきっかけに、農業や生態系、農村の多面的資源、のようなことに興味を持ち始める。

日本の生物多様性は４つの危機にさらされている。1. 開発や乱獲による環境破壊、2. 手入れ不足による生態系バランスの低下、3. 外来種による生態系の撹乱、4. 温暖化等による地球環境変化。その中で「第２の危機＝里山や農地など人間の活動が少なくなることで招く危機があること」に着目し、農業を促進していくことが生物多様性保全に繋がると考えた。

「非営利団体」設立・活動開始・環境問題を身近に

2010年6月「NPOこよみのあしおと」を立ち上げた。NPO法人ではなく、NPO＝Non Profit Organization＝非営利組織。NPO法人は、特定非営利活動促進法に基づいた、特定非営利法人。NPOであっても、法人化してしまえば収益性に追われてしまう。自分は、給与や謝礼を最低限まで受け取らなくて良い、本当の意味で非営利活動団体をつくりたかった。

活動費は基本的に自前で捻出しているが、事業を広めるためにも仙台市の委託事業へ応募した。より多くの人たちに農作業を経験してもらい、農業や環境に目を向けてもらいたい。もっと身近に環境問題を感じ、できることから行動していきたい。

ネギさん、まだまだ大きくなってよね！の草取り

農業体験開始・震災・ソーシャルビジネスとの出会い

農家で手が足りないことはテレビなどで知っていて、自分でも農作業をしてみたいと思っていたが、親戚にも知り合いにも農家はいなかった。そんななか、母の友人の実家が農家であることを知り、農作業の現場を得ることができた。自分のように「やりたくても農家の知り合いがいない」という人は多いはず。そうした人たちと、農業・人・生物多様性について考え行動していきながら、こよみのあしおとに耳を澄ませていく。

2011年3月、震災。都市も農村も営みを中断しなければならなかった。世界中が東北に注目している中で、環境に着目した地域再生プロジェクトも多く発足した。そうした潮流において、大崎市の『ふゆみず田んぼ』というプロジェクトに参加した。ここで風見先生とご縁をいただき、フラスコイノベーションスクールにつながった。収益を追うことはしないけれど、お金の運用はすべきと考え、ソーシャルビジネスについて学んだ。

大切にしていること・本質的な価値・これからの夢

活動には多様なかたちがある。農作業の対価を農作物で、というのが自分たちの基本活動。このような、収益性と違うものに価値を追う活動もあれば、経済原理を一義に置く組織もある。どちらも否定できることではない。オルタナティブ（ひとつの型にはまらない、もうひとつの価値）で良い。寄付金も募り始めた。農家の手づくり品を販売し、購入者に寄付金を上乗せしてもらう。竹でつくったお箸やジュース、ドライフルーツなど。

お金で買えない価値＝時間。大学時代に軽音楽部で活動していたことを思い出し、活動報告の場でブルースを歌った。自分のヴォーカルをみんなが楽しんでくれた。このような“ソーシャルレジャー“としての活動を続けていきたい。そして、県外へも広げていきたい。久保田歩さんのあしおとは、アンダンテ（歩くような早さでゆるやか）に、静かに響く。

収穫祭。ビニールハウスの新しい活用法

野菜を洗って出荷準備のお手伝い

イケてるカカシ選手権開催中 !!

被災した田んぼにて。たくさん埋まっている大きな石やガレキを一つ一つ集めます。

［NPO こよみのあしおと］

● WEB サイト

http://ktmhp.com/hp/koyominoashioto/

「IT を活かしたものづくり」から『出会いからの人づくり』へ。

（株）オンサイト 代表取締役　砂金よしひろ さん

2012 年 PART1 受講

就職・転職・震災

宮城県亘理町出身。工業高校を卒業し、丸森の特殊ネジ工場に就職。やがて、システムエンジニアを志し、システム会社へ転職。高校時代にソフト開発をしたときの楽しさを思い出した。二十歳前に結婚し、幼少の娘がゲームを好きだったため、娘のためのゲームソフトを開発したいと思った。

挫折も味わった。プロジェクトに失敗し、この仕事をやめようと決めた。実家の農業を継ごうと考えた。その矢先の震災。一週間なにもできずに過ごした時、改めてパソコンを触った時、やはりしっくりくると思った。この仕事を続けていこうと決めた。

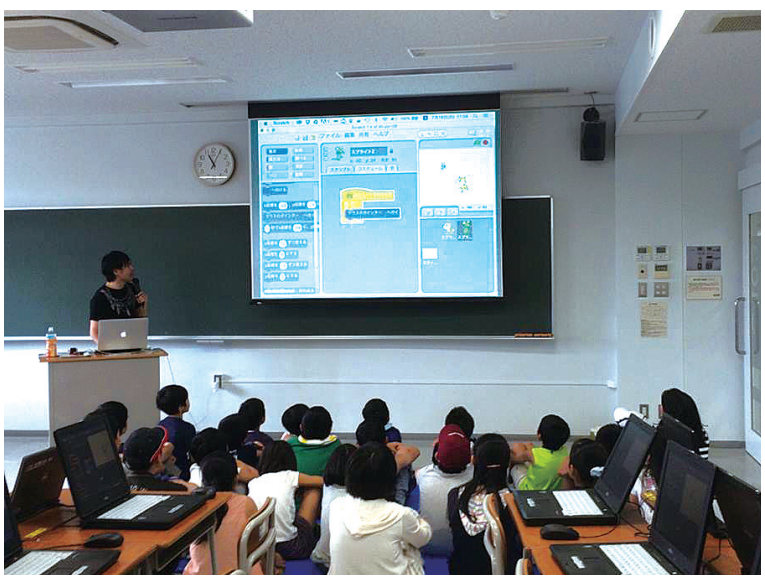
独立・フラスコでの学び・自分の存在意義

震災の翌年に退職し独立した。どのように進めるべきか考え、フラスコイノベーションスクールの門を叩いた。起業に成功したさまざまな講師の話を聞き、改めて「みんな苦労しているな」と感じた。そして「自分の悩みなんてばからしい」と。

当たり前のことだけど、やはり人脈と情報が何よりも大事。講師のひとりが言っていた『ニーズ調査』を実践してみた。自分の存在意義がどこにあるのだろう。いろいろな企業や、さまざまな年代、多様な人たちから話を聞いた。そのなかで、自問しながら気付いた。「自分が高校生のころにいてほしかった人」に自分がなったらどうだろうか。

『CoderDojo』出会いと人に恵まれて

システムエンジニアの仕事は、企業＝大人相手、そういう既成概念を外してみた。学生にパソコンやプログラミングなどを教え始め、やがては小学生を対象とした『CoderDojo（2011年にアイルランドで始まった子供向けプログラミング教室）』のCoderDojo Sendaiを立ち上げた。



「CoderDojo」の様子

子供向けのプログラムはまだテストケース段階、もちろん収益にもならない。でも、出会いと人に恵まれて、確実に人脈や経験則は伸長する。このような活発な活動が功を奏してか、大企業からの受注も舞い込んできた。

法人化・今の目標・これからの夢

偶然か必然か？仙台駅の地下通路でフラスコイノベーションスクールの佐々木氏と再会し、同氏がアドバイザーとなっている県の起業支援事業を紹介された。これがきっかけで法人化を果たした。最近では、サッカーとITのワークショップなど、活動の幅も広がっている。

自分の道が定まってきている、と同時に拡がっている。今の目標は、経営を安定化させて社員を雇用すること。やがては人の育成や起業支援もできるようになりたい。ITを活かしたものづくりが好き、教えること、出会いからの人づくりにも意義を感じる。将来的には、出身者が仙台に帰ってこられる、雇用や起業の受け皿をつくりたい。

開催イベントのチラシ

開発したアプリケーション

［株式会社オンサイト］
● WEB サイト
http://on-s.co.jp/about.html

「スペシャルニーズ」の受け皿（Schale）を創る。

一般社団法人ぶれいんゆにーくす 代表理事　伊藤あづさ さん

2012 年 PART1 受講

仙台 50 余年・研究所勤務・法人設立

長野県に生まれ、仙台での暮らしは50年を越えた。これまで大学や研究所等で、情報処理・感性福祉・香りなどの教育・研究活動に携わってきた。一方、授かった我が子が「自閉症」であったことから、自閉症・発達障害などの症状を持つ『スペシャルニーズ（一般社会での生き難さ）』の人たちの受け皿になり、そのような人たちの未来創生につながる活動を志していた。

2005年に施行された『発達障害者支援法』の成立に尽力したことをきっかけに、そうしたスペシャルニーズの受け皿となる組織を自らつくってしまおうと、勤務していた大学を辞し、2007年にNPO法人を設立した。4年後、2011年3月1日にカフェを併設した就労移行支援事業所を開設、10日後に震災。これからという矢先のことだった。

震災・活動再開・自発的市民活動として

震災によって暫くは思うように活動できなかったものの、できることから確実に進めてきた。やがて、国の補助や制度、財団などさまざまな支援を受けながら活動を再開する。

「あったらいいな」と願うことを自分たちの手で自発的に創り上げる。フラスコイノベーションスクールで受けた刺激や出会いなど、これまでの活動を通して培ってきた人との繋がり・支援力を充分に活用し、今後はより広い『スペシャルニーズ』の方々の未来創生を柱に、「自発的に」市民活動を展開していこうと考え、2011年12月現在の一般社団法人を設立した。

福祉事業とカフェ事業、その両輪で

活動の柱は、まずは、福祉事業：『スペシャルニーズ』の受け皿づくり。就労支援のためのトレーニングプログラムの実施や『ノットワークカフェ』によるお母さんたちの話し合いの場づくり。ネットワークでなく、ノットワーク。「ネット」は網目だけど、「ノット」は結び目。固く繋がり合い、必要なときに結び目を解いて自立すれば良い。

そして、カフェ機能を充実させた。このカフェには、一般客向けのカフェとしてはもちろんのこと、就労トレーニングの場、お母さんたちの雇用の場、みんなの集まりの場、いろいろな「場」としての役割がある。食事とスイーツを提供しているが、全国から食材を集め、味にもこだわりを尽くしている。

「こころとからだに優しい」を大切に、日替わりでお届けしている
『からだ想いのお昼ご飯』

「銀河系一」美味しい！と評判の『おおまちロール』

社会的企業として、ビジネスモデルの確立を

当面の目標としては『カフェ・シャーレ（Schale）～晩翠通りの口福（しあわせ）カフェ～』のビジネスモデルを確立させたい。口福：口から幸せを届けることを目的に、お料理は「心と身体に優しく」がテーマ。こだわりながら手間暇を惜しまず、家庭料理を越える味を創っている。そしてスイーツ。蔵王の平飼い地養卵と宮城県産米粉のロールケーキは「銀河系一」と呼べるのではないか。この『おおまちロール』のほか『虹の蔵（地酒〈一ノ蔵〉のパウンドケーキ）』『虹の滴（多彩な味のメレンゲ菓子）』『虹の夢（特製クリームのクッキーシュー）』『虹の絹（なめらか食感のヘルシーシフォン）』『虹の微笑（イートイン限定のふわふわパンケーキ）』など、パティシエと試行錯誤を繰り返したスイーツたちで行列をつくりたい。

夢は果てしなくあるけれど、まずは、ソーシャルビジネスとしての成功モデルを自らが実践したい。『スペシャルニーズ』への支援プログラムは、内発的な仕組みが出来上がってきた。社会貢献と利益追求の両立を図りながら、社会的企業としてのビジネスモデルを創りたい。伊藤あづささんの『虹の夢』は、未来創生の架け橋に。

［Schale おおまち］
●所在地
宮城県 仙台市青葉区大町 2-6-27 3F
●営業時間
10:30-18:00
●定休日
土曜日、日曜日、祝日

伊達政宗公に恋をして

伊達政宗公姫「五郎八（いろは）」倶楽部 事務局長　佐藤康子 さん

2012 年 PART1 受講

結婚・子育て・出会い

宮城県美里町出身。大学卒業後、大手企業に就職し翻訳業務に従事。結婚し長男の出産を機に退職。次男にも恵まれ育児に専念するが、子供の成長に伴って、小中学生向けの家庭学習教室を営むなど、育児と両立できる範囲で仕事を続けてきた。

12年前、大病を患ったときに考えたことは自分の使命、「自分はなんのために生まれてきたのか」。自分はまだ好きなことをやっていない、と感じた。そんなときに、ひとつの出会いがあった、伊達政宗公に心を奪われた。

歴史文化・五郎八姫・恋慕

当時小学生だった次男の歴史学習のために、博物館や図書館などで伊達藩の歴史を情報収集するうちに、伊達政宗公のすべてに魅せられた。お洒落で粋でグルメ、女性にもてて部下に慕われる。理想の男性像だった。

政宗公が愛した素敵な文化があるのに、まだまだ知られていない。やがて、伊達政宗公と正室・愛姫の間には聡明な娘『五郎八姫（いろはひめ）』がいたことを知った。心がときめいた、伊達政宗公への恋、五郎八姫への想い。

伊達政宗公姫「五郎八」倶楽部発足

五郎八姫は徳川家に嫁ぐが、やがて悲劇の離縁を経て晩年は現仙台市青葉区栗生で過ごした。その屋敷跡が今も残っているが、記念館もなくあまり知られていない。姫には隠れキリシタンというエピソードもあり、さまざまなドラマを秘めている。この歴史資源をPRできないものかと考えた。

この五郎八姫をテーマに地域の学び場をつくりたいと、地元の歴史研究家らと共に『伊達政宗公姫「五郎八」倶楽部』を発足した。五郎八姫にまつわる勉強会や地域の歴史散策会を開催し、紙芝居の制作上演も行っている。また、姫が夫と過ごした上越市高田の市民団体との交流事業も続いている。

「五郎八」倶楽部・高田開府 400 年記念上越仙台交流事業　いろはもみじの植樹　天麟院にて

ライフテーマ・社会勉強・夢への準備

日本文化が大好きで着物の着付けができる、そんな自分にできることは、政宗公や五郎八姫の時代や日本の文化を楽しんでもらう体験型観光事業。自分が生まれてきた意味、好きなことをようやく見つけた。

起業を目指し受講したのは（株）ゆいネットの稲葉雅子社長が講師を務めたインターネットを活用した起業支援講座、そしてフラスコイノベーションスクール。起業するにあたって、自分があまりにも社会を知らないことに気づき、まずは働く必要があると考えた。そこで、稲葉社長に「いずれ起業したいので働かせてほしい」と願い出た。地域ビジネス創出支援チームに所属し起業家を応援しながら、自分の起業の準備をする。急がば回れ。起業のリスクを充分に学んだ上で、バランスと目的を吟味する。

古民家をリノベーションして、地域の人たちが県外や外国の人たちと集える場をつくりたい。地域の伝統文化や食育、人材育成など、次世代へさまざまな継承をしていきたい。そのためにも今は、政宗公や五郎八姫への想いを大事に育てながら、粛々と自分ができる準備と活動を進めていく。まずは着物と日本の伝統文化を学び楽しむ体験会を開催し、『伊達姫文庫』の活動を広めていく。佐藤康子さんの恋は、未来永劫変わらない。

「五郎八」倶楽部・散策会の様子

「五郎八姫物語」イベントにて

ドイツ人留学生もお姫様に変身！

週末『バルーンアーティスト飯田風船』、平日は？

バルーンアーティスト　飯田淳穀 さん

2013 年 PART2 受講

就職・震災・移住

愛知県出身。2013年に仙台へ移住。大学を卒業後、大手自動車会社の部品営業に従事した。起業したいという思いは漠然と持ち続け、起業スクールに通ったりしていた。

震災一年後、仙台へ。その後愛知と仙台との行き来を繰り返し、少しずつ縁を紡いでいくうちに、移住を考え始める。何かをしたい、自問、自分がやりたいことはなにか？そんな矢先に群馬県への転勤辞令、しかし、その足は仙台へと向かう。

生業づくり・バルーンアート・フラスコへ

転勤を断って仙台へ。自分ができることは何か？大学時代にアルバイトでバルーンアートをつくっていた、でも、それだけでは生活の糧になり得ない。何かコラボレーションができるか？フラスコイノベーションスクールを受講し、自分の生業（なりわい）を探していく。

バルーンアートで、イベントから声がかかり始める。その頃、ご縁の出来た司法書士事務所からも「働いてみないか」という声がかかる。やがて、その組み合わせの関係性が生まれた。接点となったのが住宅展示場。家を購入するお客さんの大半は住宅ローンを組むため、手続き業務のために司法書士の出番となる。住宅メーカーは集客のためのイベントを探している。ありそうでなかったビジネスモデルの原石を見つけた。

『風船さん』と呼ばれて

住宅展示場ではいつも、さまざまなイベントが行われ、家族が喜ぶサービスを提供している。バルーンアートは、家族連れにとても喜ばれ、住宅メーカーからも重宝される。好きなバルーンアートを定期的に実施できて、司法書士事務所はお客さんとの距離を縮められる。WIN-WINのスキームが

左上：移住当初のイベント会場にて
左下・右上：「寺フェス」でのバルーンアートの様子

出来上がった。

そして、いつからか『風船さん』と呼ばれるようになった。最良のモデルを見つけた。

自分だけの、笑顔のビジネスモデル

司法書士事務所の一員として、住宅展示場に来た人々にバルーンアーティストとして接する。そして、住宅購入や不動産登記への手続きへと進む顧客に対し、今度は司法書士事務所の住宅ローン担当として再会するという仕組み。

最初の出会いが楽しい場であるために、その後も楽しい関係でいられる。笑顔で出会い、笑顔で書類を引き渡す、ありそうでなかった「笑顔のビジネスモデル」。これは、自分だけにできることかもしれない。『風船を通じて家族に笑顔を提供するサプライリスト』を目指して。

夢は大きく、このビジネススキームを確立し、他県・全国・海外へ進出すること。地元へ凱旋の機会も、そう遠くない未来に訪れるはず。飯田淳毅『風船』さんは、東北で、世界で、笑顔を創る。

「研究・知識・経験」を積み重ね、やがて地元に役立てたい

東北大学大学院工学研究科 博士後期課程　田中康基 さん

2012 年 PART1 受講

進学・研究・郷土への想い

北海道釧路市出身。釧路高専から東北大学大学院へ。専門は機械工学と電子工学。マイクロマシン、MEMS（Micro Electro Mechanical Systems）という、機械部品や電子回路などをひとつの基板に集積化するシステムを研究している。

いつか釧路へ帰りたいと考えている。自分が研究した工学知識を応用して、地元産業に寄与したい。北海道ではICT需要の８割が札幌に集中しているが、地元の酪農や農業、漁業などにも自分の技術がいつか役立つと思う。センサーやICタグを活用し、家畜の個体認識や体調管理、データベース化など、小さく安く開発できるはず。そう考えている。

ふるさとの現況。学生生活と社会体験

父は農協職員だが、このままでは地元の基幹作業である一次産業はなくなってしまう。進学率も低く、雇用機会も少ない。せっかく開拓した土地から、産業が消えてしまう。

学生のうちになんでもつくれるようになりたいと考え、東北の復興インターンシップやインキュベーション事業に参加した。復興支援団体の顧客情報や寄付履歴など、煩雑な情報管理の効率化に向けた技術提供をすることによって、技術者として自分の能力に気付くことができた。

震災と復興プロジェクト、自己の技術の活かしどころ

復興プロジェクトに関わって分かったのは、どこも情報管理に困っているということ。普通にシステム会社へ依頼すれば数100

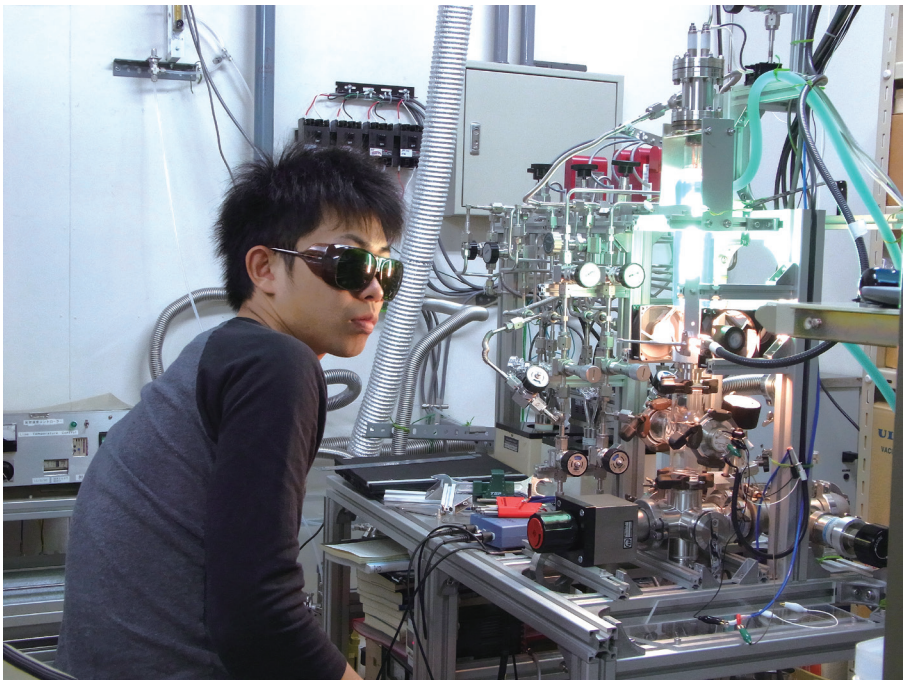
万円かかるかもしれない技術を、学生の自分なら手軽に提供できる。

フラスコイノベーションスクールでソーシャルビジネスを学んだ。釧路にいる頃は、本屋さんに置いてある、カフカ、トルストイのような古典や哲学からビジネス書まで、あらゆる分野の本を読んだ。そうした知識がいま社会と関わるなかで役立っているようにも思える。

自分の進むべき道、思い描く展望

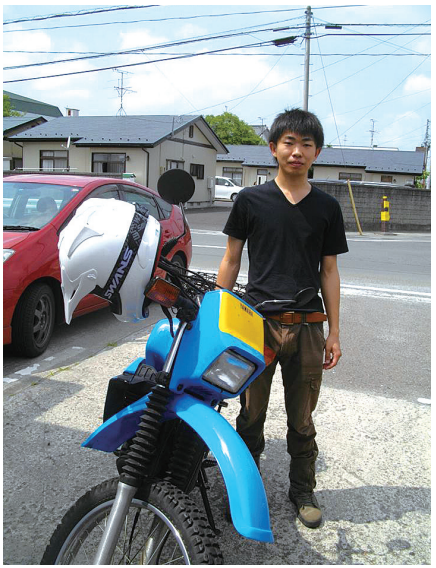
学生生活での研究活動だけでなく、震災や復興活動をきっかけに社会と関わることで、世の中の実情が少しだけ見えてきた。いろいろな方法のなかで自分の進むべき道があることが分かった。

東北大学の工学分野における研究水準は日本でも最高峰と言われている。そこで学び研究した知識を活かして、いちどは一般企業で働いてみたいと思う。そうした企業経験と大学での研究経験を集積し、やがては地元・釧路で地域振興に役立てたいと願っている。田中康基さんの想いは、ふるさとへと続いている。



大学での実験のようす（MEMS のための薄膜堆積実験）

WATALIS での支援のようす



趣味？ 80 年代の古いオートバイ
（修理しながら乗ることで機械技術が身に付く）

書は「磨きあげた心」を映す。

書家　有地和子 さん

2012 年 PART1 受講

上京・教職・帰郷

宮城県仙台市出身。関東の大学で教職資格を取得し、書道と国語の教諭として東京と千葉の高校で教鞭を執った。当時の高校は信じられないくらい荒れていたが、同年代の息子がいたこともあり、生徒と真剣勝負で向き合ってきた。

関東で長年暮らしながら、教育者として母として、ただ必死に教育と子育てに追われてきた。一方、ずっと書家を目指し精進してきた。21年前、息子の独立をきっかけに仙台へ帰郷。

運命の出会いから『仙台文の會』発足

運命の出会いから『仙台文の會』発足

故郷・仙台で文章講座を受講したことが、故・井上ひさし先生との運命的な出会いになった。それは、講座の最終日、井上先生から全く思いがけない、素敵な提案があった。「このまま解散するのはもったいない。会でもやりませんか、もちろん僕もお手伝いします」。

井上先生の呼びかけに『仙台文の會』を

井上ひさし氏直筆の色紙を前に

上：作成した和紙シールセット
下：仙台文の會刊行物

発足。約100人の会員が集まった。『文の會通信』を定期発行するとともに、先生の故郷である山形県川西町の『遅筆堂文庫生活者大学校』に欠かさず参加するなど、活発な活動を続けた。（＊山形新聞より抜粋・加筆）

宮城県ビジネスグランプリ奨励賞『みちのく花むすび』

もうひとつ、大きな転機が。実家はかつて、花京院通りで米屋を営んでいた。「実家を畳まずに、何か社会貢献的な活動ができないものか」。「みんながご飯をもう一杯ずつ食べたら、日本の農業問題は解決する」という井上先生の言葉をヒントに、ビジネスアイデアが芽生えた。

県のビジネスグランプリにエントリーし奨励賞を受けたことをきっかけに『みちのく花むすび』を開業。登米市中田町の『はちみつ米』と旬の食材を組み合わせたおにぎりやお惣菜、こだわりの加工品などを店頭に並べた。雇用の創出と農業者の士気を高めるコミュニティビジネス。

書家として、文の會として

誠実な出会いが運を開く。街の再開発で店舗兼住宅が移転せざるをえず、『みちのく花むすび』を閉店。しかし、活動は継続する。いくつかの夢を叶えた。銀座の鳩居堂で個展を開催のあと、新聞社の斡旋により、書家としてエジンバラより招聘を受けた。

フラスコイノベーションスクールでは、情報収集のためのアンテナの張り方やビジネスモデルの組み立て方を学んだ。故・井上先生から会にいただいた色紙をシールにし、商品化。生前井上先生の許可をいただいていたアイディアであった。講座の際、必ず墨と硯を持参し、筆を執っていただき集めてきた色紙である。

同じ墨と硯を使っても、仕上がりは人により千差万別。有地和子さんの書は、磨き上げた心を映す。

農業で「楽しく」稼ぐ。

農家　鎌田大地 さん

2012 年 PART1 受講

「農家は継ぐな」・反骨心・「必ず帰る」

宮城県登米市出身・在住。東北大学農学部（農業経営経済学研究室）卒業。『大地』という名を授かった時点で、その生業（なりわい）は定められていたのではないか。祖父は専業農家、父は兼業農家。自分の成長に合わせるように、近所には空き家と耕作放棄地が増えていった。

誰もが口を揃え「農家は継ぐな、食えない」と、言われるたびに「俺が何とかする」という反骨心が募っていった。高校時代から、「実家に帰る気まんまん」だった。

ミッション・自問・解

「実家と登米市をなんとかする」というミッションのため、農家のこせがれネットワークやフラスコイノベーションスクールなど、大学時代は積極的に出会いの場を拡げた。

地域全体のまちづくりや NPO なども検討していたが、やがて「そういうことは自分以外でもできる」「自分にしかできないことは何か？」という自問への解を探すようになる。

中山間地
＝条件不利地のビジネスモデル

自問への解、「農家で食っていけるモデルケースをつくること」。実家のような中山間地＝条件不利地に適合する農業モデルを探す。祖父を先生として、農業技術を学び直す。風見先生から受けたソーシャルビジネスの教えを、農業で実践しようと考える。

着目したのは種（たね）。F1 種はすぐ育つし簡単だけど、面白くない。在来種・固定種があるのに、外から種を入れたくない。地種（じだね）はその土地でつくると強くなる、しぶとく生き返る。

朧げな夢が、次第にリアルに見えてきた。自分だけの『多種共存の森』を創る。肥料も自給しながら、少量多品目：胡麻・ほうれん草・白菜・大根・ルッコラ・にんにく・じゃがいも・長芋・里芋・紅あずま・ラディッシュ・豆・ささげ。地種系を増やしていく。

「農業」は『暮らし』そのもの

「強い農業、６次産業化」と叫ばれているけれど、自分は一次産業に特化した経営計画を立てている。同志・仲間も増えてきた。目指すは、農業（本業：ファーマー）と林業（副業：フォレスター）との組み合わせ。祖父も農閑期に炭焼きなど、林業的副業を工夫している。

中長期的な夢は、「中山間地の価値」を発信すること。農業は、生活手段でなく、暮らしそのもの。いずれは畜産も手掛けて農業林業の融合による体験プログラムを開発し、田舎暮らしを、楽しい・面白い・やりたいと感じさせたい。CSA（Community Supported Agriculture）なども導入し、農家を分かってくれる消費者を増やしていきたい。鎌田大地さんの「夢の王国」は、農業の未来を創る。

「平和の象徴オリーブ」が紡いだ、イタリアとの縁。

亘理地区まちづくり協議会・環境衛生推進部会　横山憲治 さん

2012 年 PART1 受講

イタリアンオリーブ 200 本

宮城県亘理町出身。生まれも育ちも仕事も、ずっとこの街にいた、あの震災のときも。出会いは必然、そう思える。出会いが出会いを呼び、東北の亘理町にイタリアンオリーブが実を結んでいる。

オリーブは平和の象徴。あの未曾有の震災から一年、2012年4月8日、200本のイタリアンオリーブの苗木が、わが街・亘理町へ到着した。4月8日は、日本では花まつり、イタリアでは復活祭。東北の、亘理の復活を願い、イタリアプラート市から贈られた温かい心遣いだ。

大阪の親戚から紡がれた

イタリアとの縁は、不思議なところから結ばれた。イタリアンレストランのオーナーシェフである大阪の親戚がフィレンツェやトスカーナと交流があったことから、イタリアより「復興支援として平和の象徴オリーブの樹を贈りたい」との申し出があり、自分へと繋がった。

親戚から紹介されたイタリアンオリーブソムリエの尽力もあり、植樹当日の一週間前に成田空港へ200本のオリーブの樹が到着した。ここから新たなドラマが。検閲の際にオリーブの樹からかたつむりが検出され、「焼却処分」を言い渡される。結局は、焼却は免れた。苦労が泡となる寸前の逆転劇。

亘理は意外にオリーブ適地

200本のオリーブは、亘理駅・温泉施設・我が家も含めた20軒の農家へ10〜20本ずつ分植された。1年で花が咲き、今年は200個ほど実を結んだ。温暖な地に適したオリーブが東北で？と疑問があるかもしれないが、亘理は仙台より気温も3度ほど高く、雨も少な

亘理町に植樹したオリーブ林の様子（2015 年 9 月）

く雪も殆ど降らない。冬の温度は小豆島と大差なく、意外に適地と言える。

だが、オリーブ栽培は決して簡単ではない。プロの挿し木、接ぎ木農家でさえ40〜50％しか根付かないからこそ高価、視察を繰り返した。小豆島役場のオリーブ課や名古屋の接ぎ木専門の園芸会社など、ときには妻と連れ立って旅に出た。アンテナを張り巡らし、必然的な出会いを紡いでいく。

結実した果実

親戚からの一本の電話が、街全体へ

長年生業としてきたNC旋盤のプログラミングの仕事もあとわずか、もうすぐ定年を迎える。その後は嘱託で仕事を続けながら、亘理町の観光振興に携わるつもり。その準備の意味もありフラスコイノベーションスクールを受講した。いろいろな世代との出会いと人の輪が生まれた。

今年、町役場でオリーブを40本買い足した。親戚からの一本の電話が、町全体の取り組みになったことを誇りに思う。これからもオリーブの実は毎年結ばれる。今度はイタリアから圧搾機を譲ってもらえないかと考えている。このプロジェクトに終わりはない、ここからが、始まりだ。横山憲治さんから縁が結ばれ、紡ぎ、その地域が花開く。

「ふらっと来れる」東北を目指して

一般社団法人ふらっとーほく　阿部結悟 さん

2012 年 PART1 受講

進学・休学・帰郷

宮城県山元町出身。仙台の高校から北海道大学教育学部へ進学。2011 年 3 月 11 日のときは大学 3 年生、ボランティアで帰省を繰り返していたが、やがて休学・帰郷した。

震災後、のちの『一般社団法人ふらっとーほく』の活動に参加。最初の活動は、震災ボランティアの受け入れ。地元出身者の利を活かし、温泉街に話をつけて、ボランティアの人たちが温泉宿に格安で泊まれる仕組みを運営していた。県外の人たちが気軽に来てくれるよう、法人化の際の法人名は『一般社団法人ふらっとーほく』と名付けられた。

ノウハウ移転から「伊達ルネッサンス」

山元・亘理・新地でまちフェス『伊達ルネッサンス』を開催。きっかけは経産省のソーシャルビジネスノウハウ移転事業。岡山県の NPO が実施した『オンパク・みちくさ小道』という地域資源を活用した交流体験プログラムをモデルに学び、山元町でスキルのある人を探した。震災前からたれ作りをしていた『京子さん』と出会い、彼女の秘伝のたれ作りのワークショップを実施。大変好評のため、『復興だれ』の商品化を支援し、成功体験となった。

このような経験がきっかけで、自分たちの街で想いやスキルのある人達を探し出し、一緒に出来ることを手伝いたい！という思いが強まった。そして、山元、亘理、新地をつないだ『まちフェス ~ 伊達ルネッサンス ~』につながった。(*)

「わたりグリーンベルトプロジェクト」

2013 年からは『わたりグリーンベルトプロジェクト』の運営にも参加。活動の柱は大別して 3 つ。1. 防潮林の復活：伊達政宗公の時代から 400 年続いた防潮林が、さきの津波でほぼすべて壊滅。この防潮林復活を目指して植樹を行う。2. 復興まちづくりマスタープラン作成：町民発のワークショップを繰り返し、復興まちづくりプランを作成する。3. ボランティアツーリズム：将来の町を守る防潮林を町民と町外県外の方々と苗木づくりと植樹を行う。

この活動は NPO 法人化につながり、地域内発的な取り組みとして恒常化つつある。苗が防潮林になるまでには果てしない時間、いくつもの世代を越えなければならないけれど、世代から世代へと継承する姿を引き続き見守っていきたい。

『伊達ルネッサンス塾』、県南から全県・全国・世界へ。

2014 年の 5 月から『伊達ルネッサンス塾』を始めた。いろいろな活動を行うなかで、地域のリーダーになりそうな人が見えてきているが、言葉を形にして他者に伝えることに慣れる必要がある。また、一つの街で閉じこもって活動をしていくと、苦しくなる。近隣の地域ともつながり、切磋琢磨するような仕組み

宮城県南域の地域でチャレンジしたい若者が一歩をふみだす場 (伊達ルネッサンス塾)

交流会には、塾生だけでなく、地域づくりの先輩や現場のみなさんもあつまる
(伊達ルネッサンス塾)

農家さんとさつまいもジャムをつくる
体験プログラム (まちフェス)

を作っていきたい。

『伊達ルネッサンス塾』は、そうした若者の横の連携と、地域のニーズに適した若者人材をつなぐ縦の連携の、両方に取り組む場をつくりたい。宮城県南には多様な可能性がある。地域内外からのサポートも、もっと活かすべきであり、そのためには地域内外の人たちの間で丁寧な関係づくりを構築することが必要だと考えている。

フラスコイノベーションスクールのおかげで、仙台の人たちとの接点が生まれた、これを活かしながら「志の連鎖」を、県南から全県・全国・世界へと拡げていきたい。2015 年 1 月より、一般社団法人ふらっとーほくの代表理事を引き継いでいる。　阿部結悟さんの志は、県内外から世界へと連鎖する。

＊山元の未来の種まき会議 HP より抜粋・加筆。

［一般社団法人ふらっとーほく］

●所在地

宮城県亘理郡山元町真庭字南新田 1-1

● WEB サイト

http://flatohoku.jp/

「プレイヤー」を繋ぐ「コーディネーター」になりたい

一般社団法人ふらっとーほく（当時）　細田幸恵 さん

2012 年 PART1 受講

学び・就職・企業社会への違和感

亘理町在住、東京都練馬区出身。大学卒業後、機械部品商社へ就職。大学では環境経済学を学んだ。地域活性化についても興味を持っていた。「持続可能なまちづくり」のようなことに関わりたいと、漠然とだが考えていた。

入社から時を経ても、違和感は消えずにいた。そこで出した結論は、「企業社会は自分の居場所ではない」ということ。現実社会との繋がりを感じられずにいた。

東北へ。『亘理グリーンベルトプロジェクト』

きれいごとだけではなく現実と向き合えるところ、人との出会いがあり、モチベーションが沸き立つような、そんな場所がないものか。会社を退職し、敢えて期限を定めずに、ずっと気になっていた震災地・東北へと旅立った。

未曾有の被害を受けた震災地は、どのように地域再生していくのか、再び、自然との共生は叶うのか。そのような現場を自分の目で見て、確かめて、感じてみたい。そんな思い

ワークショップをとおして地域住民が描いたマスタープラン

地域住民と企業ボランティアで育てている苗木

失われた海岸林跡地への植樹

から、震災を受けた沿岸部・亘理町の市民主体の海岸林再生プロジェクトに身を置いた。

フラスコイノベーションスクール・風見教授・「明日への未来」

所属団体の代表・松島氏が一期生だったこともあり、フラスコイノベーションスクールへと誘われた。プロジェクトの日々は充実していたものの、現場に追われている毎日のなかで、プロジェクトの意義と今後どうありたいかについて、考える時間、見つめる 時間を必要としていた。

そのような中、『グリーンベルト』という概念の礎をつくった『近代都市計画の祖』エベネザー・ハワードの著作を翻訳した風見先生との出会いは衝撃的だった。「都市と農村が融合した持続可能な社会をコミュニティが主体になってつくる。それこそが東北の目指す未来ではないか」という言葉に心底共感した。

東北の経験をもとに、新しいステージへ

ワークショップやイベントなどを重ね、沿岸部の森づくり計画も完成した。しかし、自分はまだまだ視野が狭くスキル不足と感じた。そして、再び学びの場へ戻ることを決めた。政策の視野からコミュニティ活動をどうサポートできるのか、イギリスで公共政策を学ぶ。

その先どうなるかは、まだわからない。いつか家族もつくりたい。それが地方か都市か、まだ決めなくて良いと考えている。きっと、必然が背中を押してくれる。細田幸恵さんは、未来へ向けて、新たな旅路へ。

「退職前より忙しく」夢は続く、苦難の道

一般社団法人日本漆総合研究所　蜂谷哲平 さん

2012 年 PART1 受講

人間国宝から託された遺言

北海道蘭越町出身。祖父の代までは漁師、農林業、旅館、呉服屋、精米所を営む。山形大学を卒業後、山形市役所勤務。三井物産の三井情報開発総合研究所へ出向し、地域開発に携わる。山形へ戻ったあとは、企業誘致、まちづくり、東北芸術工科大学の設立に事前の調査・マーケティング、構想から、実施計画、用地買収、校舎設計調査、対文部省の認可、開学・運営まで担当するなど、さまざまな地域開発に奔走する。

そんな蜂谷さんのライフワークは、日本古来の塗料・漆の普及啓発である。40年前、旅先の輪島で漆器に魅せられた。そして、人間国宝・東京芸大教授『漆の神様』松田権六先生の指導と遺言に突き動かされる。

遺されたミッション

輪島の塗師の呟き、「日本産漆なら、もっときれいに仕上げられるのに…」という言葉に、国内で流通する漆の99.9％が外国産であることを知る。加えて、師事した松田先生より「漆の木を沢山植えるように。同時に、漆の大木を探してそれを守ってほしい。なぜなら、その漆が最良だから」と言われ、「守ること」と「育てること」という２つのミッションを託された。

大木の漆は品質に優れているが、秋田・岩手・宮城・山形・茨城・岡山の一部の産地を除き、殆ど見かけなくなってしまった。大木になるには最低50年はかかる。この気が遠くなる『漆行脚（うるしあんぎゃ）』をたったひとりで開始する。40年前より植樹を開始、山形・宮城と今も植え続けている。それが「男と男の約束」を果たすことだと考えている。

足場を組んで、漆かき（左：蜂谷氏。義理の息子、孝さんと）

果てしなく、植栽活動

また、漆の木は捨てるところがないと言われるほど使い道が多く、樹液は塗料、漆の実は蝋燭（ろうそく）や漆珈琲に、花からは蜂蜜、木の幹からは染料が取れる。蝋燭は、米沢藩主を務めた名君・上杉鷹山公が藩政改革の一環で行ったことでも有名だ。

2009年より、林野庁の助成金を活用し、漆植林・研修会・用途開発などを行う。そして、漆の地産地消を目指して山形で植栽を進めた結果、文化庁より『ふるさと文化財の森』に設定され、国宝・重要文化財には今年から全て日本産漆が使われることになった。

漆活動の傍ら、震災復興の一助に

夢は尽きない。震災後、フラスコイノベーションスクールの学びを活かし、松島では牡蠣第一次産品の加工品を開発する『ハチコジャパン（株）』という会社を創り、６次産業化にも取り組む。漁師の家の育ちであったから、自然と漁業にも関心が向いた。2012年2月、一般社団法人日本漆総合研究所設立、現在、所員10名を数える。退職後なのに退職前より多忙だ。

さらなる夢は、パリに本社のあるオリエント急行の車内を漆塗りにすることや、近世に日本からヨーロッパへ大量に輸出された家具・調度品の修理等である。故・松田先生の遺志を次世代に脈々と繋げていくため、漆芸の腕や金箔貼りの技術をより高め、現代に必要とされるものも作るという蜂谷哲平さんのミッションは、まだまだ続く。

自らで植栽した漆の木より採取

寺社の仕事も　全面修復が完了した 1t もある大きな神輿とともに

ホテルの漆塗りサイン製作

［一般社団法人日本漆総合研究所］

●所在地

山形県山形市大字平清水 245-15

● WEB サイト

http://ulushi-hachiya.jimdo.com/

●宮城県支所

宮城県松島町根廻字桐田 15-1

ハチコジャパン（株）内

東北の出会い。「運命のパートナー」と、新しい未来へ

石巻市６次産業化・地産地消推進センター　森 優真 さん

2015 年 PART3 受講
（事務局として協力）

関東の海で育つ。
生活に寄り添うダイビング

神奈川県横須賀市出身、生まれてからずっと海を見て育ってきた。自然な流れのままに海に潜り、ダイビングが自分の生活に溶け込んでいた。やがては環境に興味を持つようになっていた。

そんな自然との対話をアーカイブズしたいという理由もあったのか、映像を学び、それを職業に。映像カメラマンとして８年の月日が流れた。そしてまた新たなステージを目指すことに。

環境ビジネスへ。
震災ボランティアから交流へ

新しい道、環境ビジネスの世界へ。BDF などのバイオビジネスという、今までとは大きく違う分野へ身を置いた。そして「環境と地域の融合」という、ライフテーマとも言うべきキーワードが自分の心に芽生えてきた。

そんな折、東北で起きた未曾有の危機。2011 年 3 月 11 日、東日本大震災。自問、関東に住む自分にできることはあるか。まず

首都圏で開催したイベントでの集合写真

イベントでは宮城のメニューを用意してもらう。
販路開拓につなげる

始めたことは、潜水器材が流されて困っている漁師への手助け、知り合いから器材を集め、震災地の漁港へ運び込んだ。震災地との交流が始まった。

東北の未来創りの一助になるために

目線の先に、東北がつながった。仙台で開催された『ソーシャルビジネスメッセ』に参加した。友人に勧められたカフェで、偶然にもメッセの運営スタッフに出会った。

「ボランティア活動でやっていることを仕事にできる」。そんな話をもっと詳しく聞きたくて、その運営スタッフの女性にプロジェクト事務局長の佐々木氏を紹介してもらい、やりとりが始まった。

移住・かけがえのない出会い・未来への扉

さまざまな出会いを経て、『WORK FOR 東北』の面接に訪れた。東北で地域振興のスタッフとして働くことを志していた。石巻で働くチャンスを得た、でも迷っていた。将来設計のなかで、石巻での仕事はどう位置付けられるのか。

佐々木氏に相談した、答えは明解だった。「まずは来ないと始まらない。やってみなければ、その先は誰にもわからない」。背中を押されて、迷いは消えた。

石巻市６次産業化・地産地消推進センターの産業復興支援員として、地域の漁業者・農業者の支援活動を行う。海育ちの自分には、沿岸部を中心とした活動に大きな違和感はなかった。石巻ブランド産品の EC サイトの立ち上げが中心の業務となったが、これには映像カメラマンとしての経験を活かすことができた。

６次産業化をテーマにした『フラスコイノベーションスクール石巻』に携わり気付いたこと。地域の資源や技術、そして人などを繋げるコーディネーター役は自分の天職ではないか。

業務外でも、業務で出会ったご縁を活かして、いくつかのプロジェクトを立ち上げた。石巻と首都圏を「食」で結ぶ交流イベント、石巻の中心市街地ではじめた朝のトークカフェ。これまで以上に公私が有機的に繋がっている。

大きな人生の転機。石巻での、シェアハウスでの出会いが運命となり、今年結婚することに。ここに来ることがなければ出会えなかった、かけがえのないパートナー。これからは二人で、新しい家族と、未来への扉を開いていく。森優真さんの新しいステージが、またここから始まる。

［石巻市６次産業化・地産地消推進センター］
●所在地
宮城県石巻市立町二丁目 6-23
● WEB サイト
http://ishinomaki-6jika.jp/

『漁師：１次産業の未来ステージ』を創るために

漁師　豊嶋 純 さん

2015 年 PART3 受講

生まれも育ちも石巻・荻浜、そして街へ

石巻で生まれ、石巻で育った。その昔は、伊達政宗の命を受けた支倉常長が出帆した荻浜（おぎのはま）。祖父はかつて役場職員、父は牡蠣・タコ・コウナゴなどの漁業を営んでいる。でも、自分は漁業を継ぐ気はなかった、街に出たいと思っていた。

大学受験のち仙台へ。社会に出てビジネスを学びたいと考えていた。自分だからこそできるビジネスモデルを考え、見つけ、実践することを夢見ていた。

自問自答・帰郷・震災

仙台で塾講師の仕事をしながら、自分の本当の姿を探していた。自分にしかできないことは何か、本当にやりたいことは何か。そもそも何ができるのか。果てなく続く自問自答の毎日。

石巻へ帰郷、この小さな漁港でビジネスを起こせるとも思えず、塾講師を続ける。人生模索の日々、そんななか、人生そのものを変える出来事が起こる。2011 年 3 月 11 日、震災。

内部価値変化・漁業の楽しさ・自分ならではのビジネスモデル

石巻・宮城・東北の漁業は壊滅状態、それに輪をかけた風評被害、廃業も考える父。そんななか、自分のなかで、何かが変わるのを感じた。

塾講師を辞めて漁業に専念することを決意。牡蠣の養殖に取り組む。水揚げ、加工（殻剥き）、出荷までの全プロセスを管理する。牡蠣の季節を終えると、漁が始まる。タコの籠漁は伝統漁法、これを残し継承すべきと考える。

震災ボランティアに来ている友達が、楽しそうに漁業に携わる姿に触れたことも大きなきっかけになった。漁業の面白さ・楽しさが分かってきた。これこそ自分が探していた、この地で生まれ育った自分にしかできないビジネスモデルではないか。

フラスコ受講・ストーリーづくり・水産業の未来へ。

仙台で開講していたフラスコイノベーションスクールが、６次産業化をテーマに石巻で行われることになった。学んだことは「６次産業化と地域ブランドには、ここだけにあるストーリーが必要」。

荻浜だけのブランドストーリーはあるか。ここならではの歴史と伝統がある。かの岸朝子の父、『日本の牡蠣王』と呼ばれた水産実業家・宮城新昌氏が、この浜を適地と讃え、牡蠣養殖業をもたらした。

夢がかたちを結ぶ。あたりまえのこと、良い牡蠣をつくる。この地の基幹産業として、正常な１次産業の価値を創造し、それを主体として２次・３次産業を融合させる。つくりがいのある牡蠣を創る。

付加価値創造のひとつとして惣菜商品の開発にも着手し、６次産業化総合化事業計画が農林水産大臣より認定される。まだまだ始まったばかり。やがては都市圏にオイスターバーも。豊嶋純さんの夢は、水産業の未来へ。

牡蠣の剥き身

加工場の様子（牡蠣の洗浄作業中）

対談1 宮城治男（NPO法人ETIC. 代表理事）×風見正三（フラスコイノベーションスクール総合プロデューサー）

2013 年 10 月フラスコイノベーションスクール Part1 が終了し、Part2 を始めるにあたって、これまでの受講者や支援者を対象に、宮城治男氏をお招きし、社会起業家としてのマインドを宮城氏の経験を基に伺った。タイトルは、『社会起業家への道〜社会を変えるを仕事に〜』であり、ホストはスクール総合プロデューサーの風見正三氏である。

- 宮城治男氏について -

風見 : 現在、社会起業家のトップランナーとして、多くのメディアが取り上げている宮城氏でありますが、起業の経緯についてはあまり知られていないように思います。まずは、これまでの経緯を率直にお聞きしたいと思います。

宮城 : 学生時代 (1993 年)、キャンパスに起業家をお招きして、事業についてお話していただく活動を始めました。それが、いつの間にか忙しくなって、やめるわけにはいかなくなったというのが現状です。

風見 : 宮城さんには、いつも気負いがないですよね。学生時代に活動を始めようとしたきっかけは何でしょう。

宮城 : 小さい時から、世の中と自分自身の間にギャップを感じていました。いわゆる団塊ジュニアと呼ばれる人口の多い世代です。バブルの最中に高校時代を過ごしており、生まれた時から、お金や物に困ったことのない、初めての世代ではないでしょうか。そのような時代に育ってきた私たちは、これまでの価値観とは、違った価値観を持っていると思います。つまり、何が価値のあるもので、何が喜びなのかということです。昔から、日本ではお金儲けをする、大金持ちになることに対して良くも悪くも、リスペクトしてこなかったという側面がありますが、このような部分も変わってくるだろうという予感がありました。今の時代を生きている、我々の生きがいや幸せは、世の中の誰も与えてはくれない。自分たちで作り出していかなければならないだろうという漠然とした思いもありました。

そのような思いを抱えて大学時代を過ごしていました。当時、大学の先輩たちは、バンドブームから音楽をやったり、演劇をやったりする人が多い印象がありました。政治を変える、マスコミを変えるなどの活動をする人もいました。しかし、4 年生になると、皆揃って足を洗ってしまう。せっかく早稲田まで来たのだから、有名な大手企業に入らなければいけないという強迫観念のもと、就職活動を行っている人ばかりでした。就職した先輩が、サークルに顔を出した際に、会社や社会への愚痴を述べている場面によく遭遇しました。その時に、「一生懸命勉強して大学に行っても、こんなことになるのなら、つまらないな」と思いました。勉強して良い大学に行くということが、むしろ自分の可能性を狭めているのではないかとも感じていました。どうにかしたいという思いはありましたが、まだ、光のようなものを見つけることはできませんでした。

しかし、初めて、起業家のお話を聞いた時に、「会社は自分でつくることもできるのだ

ということに気づきました。起業したいとは思わなかったのですが、「このようなことを知ったら、わくわくする人はいるだろう」と感じました。そして、人生を自由に切り開こうとする多くの人に知らせたいと思ったのです。

-ETIC のビジネススタイルについて -

風見 : 社会に求められていたということは考えられます。学生時代のアイディアが、なぜここまで広がったのでしょうか。

宮城 : 実はよく分からないのです。ただ、すごく平凡なのですが、続けていくということが、この世界ではいかに大事か、ということを痛感しています。誰も本気でやる人のいなかった世界で、時間をかけて行うので、必ず第一人者になるのです。諦めないでやり続けたら、第一人者であり続けることができます。私は、そのような道ばかりを選んできました。おかげで注目されたり、たくさんの人にお手伝いしていただいたりしながらやってくることができました。

風見 : これまでのビジネススタイルでは、既成のものがあればそれに乗っかることが一般的な中、第一人者であり続けるというのは、すごく難しい面があります。第一人者になること、そしてやり続けることが、おそらくイノベーターの条件だと思います。

IT 系のソーシャルベンチャーが発達してきた中で、あえて億万長者にならず、ETIC. を続けたのは、なぜでしょう。

宮城 : なぜ、あえて億万長者にならなかったのか。すごい問いですよね。そこで考えてみたのですが、インターネットを使ったビジネスにチャレンジすることを黎明期で支えた多くの人たちは、社会変革のマインドを持っています。よくインターネットは、パワートゥーザピープルのツールと言われていますが、新しい人や社会の可能性を追求していく、フロンティアだと思います。そこに挑戦していく人々には、シンパシーを感じていました。

ところで、アメリカのシリコンバレーでは、インターネットの黎明期を、学生が支えていました。社会にはまだなかった技術に対して、時間をかけ、お金をかけずに没頭できるのは、学生だけだったからです。日本においては、渋谷で同様のことが起こっていました。私は、渋谷にあるこうした活動を盛り上げる NPO の事務局を担っていました。

このような経緯があって、どこかの企業の看板をもらったり、特別にコミットメントしたりするのは、バランスが崩れると思っていました。真ん中にいる人は、真空というか、中立的であり、偏ってはいけないという想いがあったからです。したがって、ノンプロフィットで行こうと思ったのです。知識があ

れば、もっとやりようがあったと思うのですが、当時はノンプロフィットの部分で精いっぱいだったので、結果的に様々な事業に手が出せなかっただろうなと思います。

風見：宮城さんはとても純粋なのだと思います。真空という精神性が、20 年間変わっていないのでしょう。IT 長者を支えながら、自分のスタンディングポジションを変えなかった。それが今の宮城さんをつくっていると思います。日本において、うまくやるということ以上に、世の中を変えるという、SB の根幹を築いてきた方なのだと思います。

- これからの展望について -

風見：宮城さんには、新しい社会の構想がありますか。

宮城：世の中こうあるべきという形にこだわって、みんなを導くというイメージはありません。むしろ、みなさんが、一番自分らしい挑戦をし続けた結果、出来上がる社会を見てみたいです。こうあるべきというものに持っていくよりは、新しくつくりだしていく、創造していく時代です。みなさんは確実に挑戦できる環境にいると思います。自分で選んだことには、自分でできる自由や、環境があります。実現する、挑戦することの総和の社会が我々の理想とする社会だと思います。

風見：最近は、ボトムアップの意見をいかにつなぎ合わせられるかというものが要求されています。「真空」という言葉はすごく良いと思います。自分がいることで周囲に影響を与えるのではなく、自発的にみなさんが自分のビジョンを見つけられるお手伝いをする。これが ETIC. であり、宮城さんの生き方だと思うのですが、いかがでしょうか。

宮城：そうかもしれません。真空なんてわかりにくいことを言ってしまったかもしれませんが、ある課題を解決したいとか、このような社会をつくりたいという志を一義に掲げて仕事をすることが大切です。

私は、「欲がないですね」と人に言われますが、とても欲深い人間だと思います。自分が生み出す、自分の仕事によって生み出される社会的なインパクトを最大化したいという思いが常にあり、その手法として NPO を選んでいるだけであって、自分と掛け算した時にすごく合っていると思います。NPO は、中立的な立場ということが社会にとって分かりやすい法人形態です。一方で、とてもパワーがいる選択でもあります。

- 震災復興に関する思いと東北へのメッセージ -

風見 : 東北は、震災によって、注目を集め、その動向が、日本や世界を変えると言っても過言ではありません。我々は、SB の可能性を追いながら、走り抜いてきました。SB がどのように世界を変えるのでしょう。また。そのためにはどんなことを発信するのが大切でしょうか。

宮城 : SB がどのように世界を変えるか、簡単に言えませんが、SB が世界を変えなかったら何が変えるのかと思います。通常のビジネスは、SB 化していくでしょう。

逆に言えば、SB の視点を持たずに大企業が生き残れるか、さらに言えば、SB を意識しない企業が企業でいられるか、問われる時代に来ていると思います。

風見 : 最後に、東北に生きるみなさんにメッセージをお願いします。

宮城 : 私はお礼を申し上げたいです。右腕プロジェクトという事業においてたくさんの若者が、これまで歩んできた道とは、異なる人生を東北で教えてもらっています。お金も大切ですけれど、彼らは、それ以上にわくわくし、喜びが得られるものを見つけています。東北が困難な状況にあるからこそ、ポジティブな使命感を持った人が集まっています。企業も注目するし、世界が注目をします。ご縁があり、国際会議に出席させていただくことがあります。東北の話になった時に、高齢化を先取りした状況の中で、福祉の課題に取り組もうとしているとか、福島の課題もある中で、新しい自然エネルギーの開発に挑むビジネスがあると伝えると、非常に関心をもたれます。世界からみても注目する理由のある場所になっているということは言えると思います。

風見 : 世界は、東北がどのように変わっていくか注目しています。みなさんの考えの総和が新しい社会像になるのです。

これから問われることは、新しい社会像を東北がどれだけ実現できるかということです。それを実現する突破口は、想いを着実に実現し、それをつなげていくことです。

世界というのは、自分から隣の方と手と手をつなぐことで広がっていくものです。ひとりひとりが自分の意志で志を持って、新しいことを始め、その連鎖が新しい社会を創ると思います。既存社会の責任を問うのではなくて、我々が始めるのです。

宮城 : ぜひ、ご縁を大切に、自分の想いを行動に起こしてほしいと思います。連鎖というのは、行動を起こしたからこそ生まれるものです。みなさんの手が出せるところから、自分らしい第一歩を踏み出してほしいと思います。

宮城治男　MIYAGI Haruo

NPO 法人 ETIC. 代表理事

1993 年より若い世代が自ら社会に働きかけ、仕事を生み出していく起業家型リーダーの育成に取り組み、400 名以上の起業家を支援。96 年より長期実践型インターンシッププログラムを事業化。2001 年には ETIC. ソーシャルベンチャーセンターを設立、社会起業家育成のための支援開始し、社会起業塾イニシアティブ等を手がける。04 年からは地域における人材育成支援のチャレンジ・コミュニティ・プロジェクトを開始。11 年から震災復興支援にも注力。

風見正三　KAZAMI Shozo

宮城大学事業構想学部 副学部長・教授

英国国立ロンドン大学大学院都市地域計画学修士、経営学修士を取得後、東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻博士後期課程修了、博士（工学）。全国の都市再生、地域再生、環境共生のプロジェクトや都市政策、環境政策、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスに関する調査研究に携わっている。代表著書『コミュニティビジネス入門 - 地域市民の社会的事業 -』(学芸出版社)

対談2 川村志厚（経営デザイン研究所代表）×小川真美（NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター）

本対談では、特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センターにおいて、コミュニティビジネス・ソーシャルビジネス部門の設立時よりのアドバイザーである、経営デザイン研究所の川村志厚氏に自身の SB・CB 支援経験とそこから見える起業者支援の心構えを伺った。聞き手は、小川真美 (せんだい・みやぎ NPO センター) である。

- 川村志厚氏について
(学生時代からこれまでのキャリア)-

小川 : まずは、川村先生のプロフィールについてお聞かせください。
川村 : 法学部出身で、基礎法学を学んでいました。マックスウェーバーやカール・ポパーの著作を原著で読みふけっているような学生でした。思想の原点は、そういった著作でしょう。キャリアのスタートは銀行員でした。当時は、銀行の海外進出が一斉に始まり、海外要員と派遣されました。その後、英国の銀行に移り、M & A や資産運用を行っていました。ドルのフローもオイルショックも全部向こうで経験しています。したがって、今までの活動は、基本的に英語をベースに広義の文化人類学的発想に基づいています。海外生活の中で、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスにいち早く触れてきました。仙台に戻った後はそうしたビジネスについて支援する活動を行っています。

- 社会起業の支援について
(自身の取り組みから)-

小川 : 川村先生が支援を始めたきっかけはどのようなことでしょう。
川村 : 私は、アメリカのシリコンバレーにおける市民の活動を仙台で紹介したいと考え、ミミネット (MIMINet) という活動を始めました。

シリコンバレーは元々オレンジを作る農業地帯でした。工場を誘致し、地域が潤うという考え方によって、地域づくりが進んでいました。しかし、経済の変化によって投資が集まらなくなると、都市経営が上手くいかなくなって、治安が悪化しました。

そうした背景から、市民によって、まちをどうにかしようと様々な運動が起こりました。産官学民が一緒になり、プロジェクトを立ち上げるというスタイルが確立されたのが、シリコンバレーでした。地域で困っていること、現実に困っていることを産官学民が力を合わせて変えていこうという同様のスタイルを、仙台で始めました。当時は、新しい取り組みであり、私も全国で講演をするようになりました。
小川 : 最初の活動はどのようなものだったのでしょうか。
川村 :「社会と経済をどのように結びつけるか」ということを念頭に置いて、ミミネットという活動を推進していきました。県庁職員や生協、農業関係者が集まって 50 名程度の会議体をつくり、毎週のように「今、世の中で何が必要なのか」というテーマで話し合うものです。生協の高齢者宅配サービスの改善やスペシャルニーズに合わせたマウスの開発、自立式ロボット教材の開発等、今日の日本では当たり前に行われていることがそこで生まれました。
小川 : ソーシャルビジネスとはいかないまでも、ソーシャルなことを起こしていたのですね。
川村 : ビジネス以前に、しっかり喜んでもらえるかどうかということが大切でした。良いビジネスというのは絶えず世の中に出てくるものです。

ソーシャルビジネスを通して、世の中を良くする。変革するということは、一時性を帯びることです。長く続けることが良いという方もいますが、必ずしもそうではないと考えています。変革者はテンポラリーなのだと思います。私は、手がけた事業が軌道に乗り、成果が出てきた時には一切手を引くことにしています。その時には、次のことを考えています。
小川 : ビジネスという観点では、持続性が問われています。その点はどのようにお考えでしょう。
川村 : 企業も NPO もあらゆる組織は、世の中の目的に応じて存在するものです。したがって、その目的を達成した場合には、存在意義がありません。持続することが目的ではないということです。

- 支援者の心構え (寄り添うこと)-

小川 : SB・CB の起業者は、志を抱く一方で、様々な課題に悩んでいます。そういった方を支援する心構えとして、大切にされていることは何でしょう。

川村 : みなさん、悩みがあって当然です。右も左も分からず、試行錯誤する中で、考えも日々変わっていくことでしょう。その時に、相談者の気持ちが変わることを一緒に楽しむということを意識しています。コンサルタントの中には、アドバイス通りに進めないことを良く思わない方もいらっしゃいます。しかし、人間というのは、どんな人の行動でも必ず理由があるものです。その理由を考える楽しみを持つことが大切です。

小川 : 気持ちの変化に日々触れる楽しみを持つことで、支援者にも楽しみが増えてきますね。それを踏まえると、支援のあり方ということも考えていかなければなりません。

川村 : 志を持って起業する方への支援には、二つの寄り添いが必要です。それは、行動の寄り添いと心の寄り添いです。前者は、自分のリソースがどれほどあるか、それを踏まえて、相手のために調達できるリソースがどれほどか考えることであり、限界があります。後者は、相手を理解することを自分のポジションとしているかということであり、限界はありません。

まずは、頼ってくる方の心にしっかりと寄り添うことが大切でしょう。これを踏まえると、私が今までやってきた支援というのは、「とにかくやってごらん」と背中を押すことです。

小川 : 相談者によっては、背中を押すことをためらうことはありませんか。

川村 : ありません。それは押す力の問題だからです。そもそも、背中を押す必要がない人は、相談にはきません。相談者というのは、表面的には、誰かに紹介されて相談に来ますが、心の中ではそうではないはずです。病院をいくつも回る方が、「あなたはここが悪いからこうしましょう」と断言されると安心するように、パーソナリティや経歴を踏まえ、力加減をして押す。それが支援の仕事です。

小川 : 私たちも「あなたがたに背中を押されました」とおっしゃっていただく機会が増え、それが好意から出た言葉であることを嬉しく思います。

-メッセージ (これから SB・CB を始める方へ)-

小川 : 起業するという経験の上では、失敗も糧になると考えています。しかし、資金面ではリスクをかけすぎると、次のチャレンジが難しいように思います。この点について、川村先生はどのようにお考えでしょう。

川村 : ビジネスのノウハウを持つ方でも、失敗することはあります。失敗して一番困るのは資金を失うことです。したがって、まずは、「拾う、もらう」から始めるということも必要でしょう。

小川 : SB・CB の事業経営というのは、お金をかけずにアイディアを出して、進めるということですが、軌道に乗らない事業もあります。

川村 : コンサルタント側にも責任があると思いますが、起業者の意識についても考えなければいけません。ビジネスはポジショニングであり、うまくいかないのはマーケットを間

違えているからです。ビジネスとしてうまくいくマーケットにポジショニングするための支援は重要です。

小川：起業者がそういった意識を持つにはどうしたらよいでしょうか。

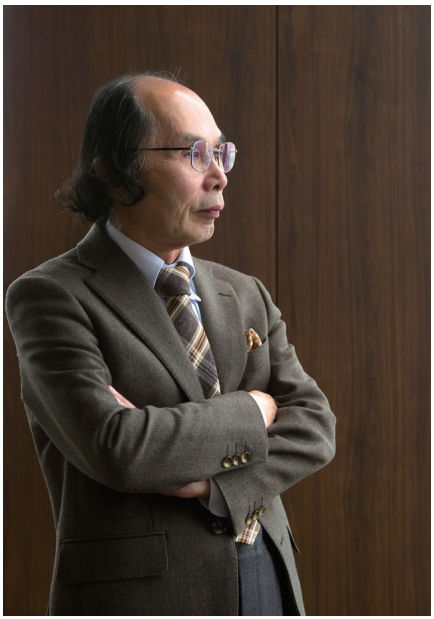
川村：考え方や人間感覚、社会感覚のフレームがどうなっているか。その根底に何を据えているか、つまり何を大事にしているのか考えてみるのが良いと思います。そこから自分のビジネスとの距離を捉えていれば、取りうるポジショニングが分かるはずです。

小川：ポジショニングのお話、人生に通ずるところがあると思います。

川村：どのような人生を送りたいか。そのためには、今、自分はどのポジションにいて、どのようなリソースを調達しなければならないか考える。全く同じことです。

フラスコイノベーションスクールから起業された方のところへも何度か訪ねていますが、みなさん、悩みながら進んでいます。社会やコミュニティのために何かをしたいという気持ちはとても尊いものです。

これまで、相談を受けた方は、2,000 人を超えていますが、みなさんが成功したとは思っていません。その中で、一番素晴らしいことは、挑戦した方が「これでよかったんだ」と思ってくださることだと思います。



川村志厚　KAWAMURA Shikou

都市銀行、英米系投資銀行、多国籍コンサルティング・ファームに勤務。国際投資・経営 コンサルティングの専門家として、約 25 年間にわたり多様な組織や企業の経営に携わる。 1997 年に経営デザイン研究所を設立。多国籍企業の経営戦略の立案・実行から、自治体・地域中小企業の経営革新まで幅広い支援を行いつつ、ソーシャルビジネスにも深い造詣をもち、社会起業家の創業支援に熱心に取り込む。特に東日本大震災後は、地域の産業復興に傾注し、マネジメントに関わる高い知見をもとに親身で情熱的な指導を続けている。

小川真美　OGAWA Mammie

地域の課題をビジネスの手法で解決するコミュニティビジネス支援、「みやぎソーシャルビジネスネットワーク（MSBN）」発起人、ソーシャルビジネス・コミュニティビジネス支援事業「フラスコおおまち」立ち上げ、「フラスコイノベーションスクール」企画・開設、ほかインターンシップ等の人材育成事業全般。仙台市協働まちづくり推進委員会委員副委員長、仙台市経営戦略会議委員など。

おわりに

2014.12.20 開催 フラスコイノベーションスクール最終報告会 クロージングトークでのメッセージ 於ウェスティンホテル

本日、オープニングで流した Enya の “May it be” は、私の好きな曲です。この中には、「Believe and you will find your way」というフレーズがあります。自分の道が分からなくなっている時は、信じる力についてもう一度考えてみましょう。

さて、人はなぜ働くのでしょう。お金のために働いているのでしょうか？確かに必要だけれど、お金のためだけでは働けないと思います。きっと、自分が輝くために働いているのではないでしょうか。輝くとはどういうことか、それは「自分自身であること」だと思います。胸に手を当てて、「本当にやりたいことに命を燃やしているか」と問いかけてください。イエスと言える人は少ないと思います。それでも、一歩ずつ近づいていくことを諦めないでください。

憧れたアーティストや自分のヒーローはなぜ輝いているか。彼らが自分の魂を解放して、自分自身であるからではありませんか。生きていて楽しいと思える人は輝いています。そうなるためには、多くのつながりの中に自分がいることを自覚し、その中で自分自身を見つめ直すことが必要です。スクールでは、たくさんのトップランナーに講演していただきました。志の高まっている人たちは、良い空気を出しています。そうした仕事でなければ、持続可能ではありません。

SB・CB は、起業することで、守りたいものを守ることができる素晴らしい仕事です。先駆者が、それぞれの仕事のイメージを変えていくことで、より豊かな生き方を選択する人間が増えていくと思います。そこに事業の大きさは関係ありません。原点に立ち返り、初心を忘れないことが大切です。志を持って続けることによって、応援する人が増えていき、結果として、自然と大きなアクションになっていくのです。

自分の力に気づいていない人が多い中で、一歩を踏み出したみなさんは、これからもやりきる自信がついてきたことでしょう。一方で、事業を始めるにあたって、背中を押してくれた方々への感謝の気持ちを忘れないでいてください。

「何をするために生まれてきたのか」、一生懸命に取り組んでいる人の心の中には、その問いが絶えず流れています。人には寿命があって、短い人も長い人もいます。しかし、重要なことは、その長さではなく、与えられた人生を生き切ることです。そう考えたとき、誰でも時間はないはずです。だからこそ、命の炎を燃やし続けている人は素晴らしいのです。

みんなが楽しいを仕事に、好きを仕事にと考える時代が到来しています。「そんなこと言ったって」と思う人もいると思います。しかし、一歩ずつでも前へ進めば、最初は心配していた人もうらやむ人生があるかもしれません。そのために、常に自分が好きなことは何かということを捉えておかなければなりません。

このスクールで、夢を持った人を世の中に送り出すことができ、嬉しく思います。私は、常に、みなさんへ「夢を持っていますか」と問いかけていきます。夢を諦めないで欲しいと思っているからです。とにかくやってみることが大切です。やれば必ず成果が出ます。「志の連鎖と優しさが地域を輝かせる」、この言葉を胸に留めて人生を歩んでほしいと思います。信じる力を持って、ともに未来をつくっていきましょう。

風見 正三

新・事業的展望

論考

本稿は、特活)せんだい・みやぎNPOセンターによるソーシャルビジネス事業を論考としてまとめたものです。
東北復興におけるソーシャルビジネス事業について、フラスコイノベーションスクールの取り組みだけでなく、
東北ソーシャルビジネス推進協議会の活動も踏まえて検証しています。

東北におけるソーシャルビジネス・プラットフォームの形成動向

～東北ソーシャルビジネス推進協議会とせんだい・みやぎ NPO センターの取り組みを中心に～

佐々木秀之（特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センター）

はじめに

東日本大震災の復興過程では、ソーシャルビジネス（以下、SB）が注目され、多くの社会起業家が誕生し、震災復興に寄与するといった事例が報告されている。事業の規模や業態は様々であるが、助成制度を用いての社会起業家の育成は震災復興の主要な政策とされ、彼ら彼女らの意見が復興現場あるいは復興政策のなかで多く採用されていったことは画期的であった。また、社会的企業と呼ばれる企業の取り組みも顕著であり、企業の社会的責任を表す CSR（corporate social responsibility）や社会的責任に企業の競争力の向上を付加した概念である CSV（creating shared value）といった表現を復興現場では当たり前のように耳にするようになっていった。

SB の普及や社会起業家の育成は東日本大震災以前から取り組まれているが、SB といった表現が浸透するにつれ、その概念をめぐる議論もある。SB とビジネスとの違いや利益性についての議論は常態においてもなされており、コミュニティビジネスと SB の範囲をめぐっての混乱もある。それらの概念は一定の定義はなされているが、復興事業を進めていく中でも、その解釈をめぐる議論が多く生じていった。一方で、東日本大震災によって、こうした議論が深まることで、SB の育成支援スキームが整備され、同時に SB という用語や概念も一般に普及していったことも事実である。

以下、本稿では、東日本大震災直後における SB の取り組みの現状を、支援者の視点で明らかにする。具体的には、東北における SB の導入経緯を説明したうえで、東日本大震災後の 4 年間における SB の取り組み、および SB プラットフォームの形成過程の検証を行う。事例として、「東北ソーシャルビジネス推進協議会」、および特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センターの実施事業である「フラスコイノベーションスクール」を取りあげる。

1. 東北ソーシャルビジネス推進協議会について

1-1. 設立経緯

東北における SB プラットフォームの構築は、2009 年 3 月に設立された東北ソーシャルビジネス推進協議会（TSB）に始まる。TSB の設立には経済産業省による政策が深く関わっていた。経済産業省では、2007 年より、SB の導入を円滑に進めるための組織形成に着手している。当初は研究会といった形式で開催され、3 年後の 2010 年 12 月、勉強会における議論の延長として、一般社団法人ソーシャルビジネスネットワーク（SBN）が設立された。この間、日本全体を視野に入れた SB 推進のためのブロック協議会の設立が進められており、その一つが、東北ソーシャルビジネス推進協議会（TSB）である。TSB の構成を示したものが図 1 である。TSB は、全国 9 ブロックに設置された協議会のうちの一つに位置づけられ、東北各県に設置された協議会によって構成される。

東北における SB は、SB の概念が導入される以前から盛んであったコミュニティビジネス (CB) を土台に、範囲を拡張したうえでスタートしているため、SB の担い手として NPO 法人が多く関与することになった。そのため、TSB における実質運営団体の構成をみると、中間支援を行う NPO 組織（インターミディアリー）が大部分を占める。なお、そこには固有の実情があった。従来の東北地方は、ビジネスの後進地とされ、事業規模の拡大を目的とした設備投資により経営破綻を招いたケースが多い。低迷する地域経済、あるいは人口流失がとまらない地域の課題解決策の一つとして、CB に活路を見出そうとしていたのである。CB の推進に積極的であった青森県では、コンパクトシティの導入も積極的に行った。コンパクトシティを導入することには、まちをコンパクトにしなければ、除雪費用だけで財政が破綻してしまうといった理由があった。そうしたことから東北では NPO が中心となって CB が推進され、ソーシャルビジネスの推進の担い手ともなっていった。

なお、TSB の目的は、SB の概念の推進および SB 事業者の育成であった。TSB では、SB という一般化されていない表現を広め、賛同する事業者・支援者の確保、ハンズオン支援によるモデルケースの事例紹介を柱とした活動を展開していった。そのことは TSB 作成報告書「東北地域におけるコミュニティビジネス・ソーシャルビジネス普及推進事業報告書（2010 年 3 月発行）」のなかでまとめられている。しかし、報告書発行の翌年となる、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、各県協議会の整備は途上のままに TSB には新たな役割が課せられることになった。

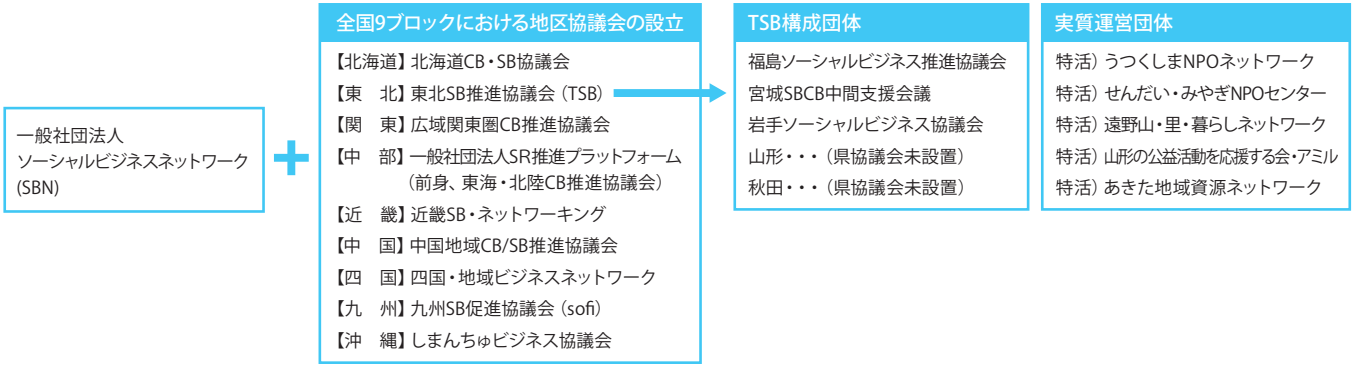


図 1　東北ソーシャルビジネス推進協議会の位置づけと構成

1-2. 震災後における東北ソーシャルビジネス推進協議会の活動

東日本大震災の発生後、経済産業省の主導するSB助成事業には、他の省庁における施策と同様、震災復興の文脈が盛り込まれていった。経済産業省では、SBによる新事業を積極的に助成するとともに、既存のSB事業者のノウハウを被災地の事業者に転換することを進めていった。それと同時に展開されたのが、「フォーラム事業」である。ここでは、全国各地でのフォーラム事業（シンポジウムやギャザリング、ワークショップ）に加えて、メッセ事業（展示会、見本市）が実施されていった。その事業主体となったのがSBNであり、そこにTSBは、共催団体として関与していくことになった。そして、震災後3年間にわたって、フォーラム事業を推進していったのである（表1参照）。

フォーラム事業は、経済産業省の補助事業としての開催であり、その事業実施主体がSBNであった。フォーラム事業は、3年間に渡って開催された。初年度は、日本全国を視野に、次年度は北関東から青森県まで、そして3年目は被災の度合いの高かった福島・宮城・岩手の各県を主な対象として事業を展開している。

また、震災復興におけるインパクトのある政策として、内閣府による「復興支援型地域社会雇用創造事業」があった。ここでは、「600人起業」を標榜し、12の団体が事業実施主体となって、社会起業家の育成が行われていった（表2参照）。この事業は、「東日本大震災からの復興の基本方針（東日本大震災復興対策本部、2011年7月29日決定）」によるものであり、そのなかで示されている「産業創出を担う人材の育成」に該当している。

ただし、この事業を、TSB、あるいはTSBの構成団体が受託することにはなってはいない。しかし、TSBを構成する各団体は、それぞれの関係の中で事業に関わっている。せんだい・みやぎNPOセンターの場合、事業実施者のうち、NPO法人石巻復興支援ネットワークと社団法人東北ニュービジネス協議会の事業に関係している。また、SBNは事業実施者となり、岩手県陸前高田市において、40名の社会起業家を輩出するに至っている。

なお、この「復興支援型地域社会雇用創造

表1　SBN、TSBによる東北復興ソーシャルビジネスフォーラム事業の開催一覧

	年度	開催日	開催地	「事業名」および“テーマ”
フォーラム事業	2012年度	2012/12/15	大阪府大阪市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 近畿」 “ソーシャルビジネスで復興に取り組む事業者（近畿＋東北）の「共存共栄」の在り方を知る”
		2013/1/27	愛知県名古屋市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 中部」 “復興から見えてきた地域のみらい”
		2013/1/31	埼玉県さいたま市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 関東」 “東北と関東がつながるとき”
		2013/2/5	北海道札幌市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 北海道」 “若者と考えるエンタメとスポーツのSBパワーを東北へ！”
		2013/2/15	福島県いわき市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in いわき」 “ソーシャルビジネス（SB）が、福島の復興・再生を牽引”
		2013/2/17	岩手県陸前高田市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 陸前高田」 “気仙地域の頑張っている「若者、よそ者、元気者」を、応援して希望につなげていこう！”
		2013/2/21	宮城県仙台市	「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 宮城」 “SBパワーで東北を元気に！”

フォーラム事業

年度	開催日	開催地	「事業名」および“テーマ”
2013年度	2013/11/19	福島県郡山市	「ソーシャルビジネスフォーラム in 郡山」 “ソーシャルビジネスが被災地の未来をつくる”
	2014/1/23	青森県八戸市	「ソーシャルビジネスフォーラム in 八戸」 “地域資源に光をあて、新たなビジネスで復興を促進する”
	2014/1/25	岩手県陸前高田市	「ソーシャルビジネスフォーラム in 陸前高田」 “人と人、人と自然、人と未来をつなぎ直すビジネスを岩手から発信しよう！”
	2014/2/11	茨城県日立市	「ソーシャルビジネスフォーラム in 日立」 “デザインの力で地域の復興・再生”
	2014/2/15	宮城県石巻市	「ソーシャルビジネスフォーラム in 石巻」 “復興に向けて「事業を継続するための環境づくり」を考える”
2014年度	2014/10/19	岩手県陸前高田市	「陸前高田復興ソーシャルビジネスギャザリング」 “現状の課題が明確になる・先が見え希望が持てる・横のつながりが強くなる”
	2014/10/30	福島県いわき市	「いわき復興ソーシャルビジネスギャザリング」 “観光・農業・再生可能エネルギーによる復興促進”
	2014/11/12	宮城県名取市	「仙南復興ソーシャルビジネスギャザリング」 “ソーシャルビジネス×アグリビジネスで東北復興”
	2014/11/16	岩手県釜石市	「釜石復興ソーシャルビジネスギャザリング」 “人と人、人と自然、人と未来をつなぎ直すビジネスを岩手から発信しよう！”
	2014/11/27	福島県南相馬市	「南相馬復興ソーシャルビジネスギャザリング」 “農業・再エネ・新しいビジネスなど、地域の総力で復興促進”

メッセ事業

2012年度	2013/3/3	福島県福島市	「東北復興ソーシャルビジネスプロジェクトメッセ」 “東北復興の「いま」「これから」がわかる！”
2013年度	2014/3/15	宮城県仙台市	「ソーシャルビジネスメッセ」 “ソーシャルビジネスが被災地の未来をつくる”
2014年度	2015/3/15	宮城県仙台市	「東北復興ソーシャルビジネスギャザリング」 “地域から未来の東北・日本を生み出す”

事業」の前段には、2010 年から実施されていた「地域社会雇用創造事業」がある。これは、「明日の安心と成長のための緊急経済対策（2009 年 12 月 8 日閣議決定）」に基づくものである。これにおいて「社会的企業の起業支援」と「社会的企業へのインターンシップ研修」が行われており、前掲「復興支援型地域社会雇用創造事業」の原型となるものであった。

以上が、東北ソーシャルビジネス推進協議会の設立、および震災前後の活動である。なお、上記 SB フォーラム事業を進める過程において、ソーシャルビジネスプラットフォームの構築の必要性が明らかになってくる。具体的には、TSB の整備であり、TSB を構成する各県協議会の整備であった。各県協議会の再整備が、東北における SB プラットフォームの構築につながってくる。次項では、そのことを視野にいれながら、宮城県の事例を、特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センターの活動を中心に検証する。

表 2　内閣府復興支援型地域社会雇用創造事業　事業実施団体一覧

内閣府復興支援型地域社会雇用創造事業
特活）石巻復興支援ネットワーク
いわきリエゾンオフィス企業組合
特活）ETIC.
特活）グランドワーク三島
一社）SAVE IWATE
一社）ソーシャルビジネスネットワーク
株式会社地域協働推進機構
社団法人東北ニュービジネス協議会
特活）20世紀アーカイブ仙台
公益社団法人日本サードセクター経営者協会
特活）100万人のふるさと回帰循環運動推進・支援センター
一社）北海道総合研究調査会（HIT）

2. せんだい・みやぎ NPO センターの取り組みについて

特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センター（以下、センター）は、1997（平成 9）年に発足し、市民社会の構築をミッションに掲げながら、NPO の普及・育成に取り組んできた日本における草分け的な NPO の中間支援組織の一つである。その過程で、CB・SB に取り組んでいる。以下では、センターが東日本大震災後に実施した「フラスコイノベーションスクール」の開催経緯についての検証を中心に、センターにおける CB・SB の取り組みを概観したい。

2-1. せんだい・みやぎ NPO センターにおけるソーシャルビジネスの取り組み

センターによる、SB の取り組みを示したものが表 3 である。ここから、センターが比較的早い時期に社会起業家育成の取り組みを開始していたことが把握される。ただし、センターによる社会起業家育成事業では、「市民起業家」という表現を用いていた。この呼称は、イギリスにおける社会起業家育成事業を意識してのネーミングであった。

センターでは、2001 年に社会起業家育成事業を開始し、国による SB の推進にともない、SB についての取り組みも開始している。その間、前項で述べた東北ソーシャルビジネス推進協議会（TSB）が 2009 年 3 月に発足しており、TSB の代表には、センターの代表者である加藤哲夫氏が就任し、また、同氏を中心に、宮城県における地区協議会の設立が行われた。それが、2010 年に発足した、みやぎソーシャルビジネスネットワーク（MSBN、通称むすぶん）である。同時期に、センターでは、TSB および MSBN の拠点ともなる、スペースの設置を行った。2010 年に、センターの入居するビルの 7 階を借用し、社会起業家の集うコワーキングスペース「フラスコおおまち」を開設した。専従の職員を配置し、法人の登記が可能なシェアオフィス事業、セミナー・起業支援相談会・交流会などの企画を展開していった。

しかし、その矢先の 2011 年 3 月 11 日に、東日本大震災が発生し、さらにセンターの代表の加藤哲夫氏が同年 8 月に病気のため逝去するといった事態に遭遇する。東日本大震災の発生後、「フラスコおおまち」は、支援のために県外から駆けつけた NPO・NGO の拠点となっていった。

その後、加藤氏の後任として、東北ソーシャルビジネス推進協議会の会長職を担ったのが風見正三氏（宮城大学事業構想学部教授）である。風見氏は、センターの理事でもあったことから、センターの SB 事業の取り組みは、以降同氏を中心に展開されることになった。センターにおける SB 事業が再開されたのは、2012 年 12 月のことであり、風見氏による SB の連続講座が開催された。

表３　せんだい・みやぎ NPO センターによる SBCB 事業

	政府によるSBCB政策の変遷	せんだい・みやぎNPOセンターにおけるSBCB事業の展開	備考
1997年（平成9）		せんだい・みやぎNPOセンター設立（1993、仙台NPO研究会発足）	
1998年			特定非営利活動促進法制定
1999年			
2000年			
2001年	関東経済産業局、局内にコミュニティビジネス・ＮＰＯ推進室を設置	「市民起業家スクール」開催（仙台市委託事業）	
2002年	厚生労働省、雇用創出企画会議にてCBによる雇用の可能性を調査	「コミュニティビジネス開発講座」スタート（仙台市産業振興事業団）、2006 年まで毎年開催	
2003年	経済産業省、環境分野に特化したCB支援が開始 中小企業白書に「新しい就業形態・ライフスタイル」としてSBが明記される	「起業家育成・支援事業」（宮城県委託事業）、2004 年度まで 2 年連続開催	
2004年		「NPO マネジメント実践講座」（宮城県委託事業）	韓国、非営利民間団体支援法
2005年			
2006年	小泉政権下で、地域経済活性化策としてCBでの1000の取組み（5年間）を支援することが明文化される		
2007年	経済産業省、「中間支援機能強化」、「農商工連携」支援事業の実施		韓国、社会的企業育成法
2008年	「CB」から「SB」への表記の転換		
2009年			東北ソーシャルビジネス推進協議会設立
2010年		インキュベーション施設「フラスコおおまち」開設 みやぎソーシャルビジネスネットワーク（MSBN）設立 内閣府地域社会雇用創造事業「ソーシャルビジネストライアルリーグ」（委託事業）、2011 年まで継続開催	新しい公共支援政策（民主党政権）
2011年		フラスコ SBCB セミナー開催（自主事業）	東日本大震災
2012年	内閣府「復興支援型地域社会雇用創造事業」	フラスコイノベーションスクール開講（仙台市委託事業） 経済産業省補助事業「東北復興ソーシャルビジネスメッセ in 宮城」開催（共催）	
2013年	中小企業庁「地域需要創造型等起業・創業促進事業」	フラスコイノベーションスクール PART2 開講（自主事業） 経済産業省補助事業「東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in 石巻」開催（共催） 経済産業省補助事業「東北復興ソーシャルビジネスメッセ」開催（共催） みやぎ SBCB 中間支援会議設立	共助社会づくり懇談会（自民党政権）
2014年		フラスコイノベーションスクール PART3 開講（自主事業） 経済産業省補助事業「東北復興ソーシャルビジネスギャザリング in 仙南」開催（共催） 経済産業省補助事業「東北復興ソーシャルビジネスギャザリング（旧 SB メッセ）」開催（共催）	

出典：NPO 法人コミュニティビジネスサポートセンター「共助社会づくり懇談会資料（2013.05.08）」、大滝精一・加藤哲夫『地域における NPO 支援 10 年の総括と展望』（2008）をもとに筆者作成。

2-2. フラスコイノベーションスクールの誕生と展開

●フラスコイノベーションスクール PART 1

2011 年 3 月に震災が発生し、復興支援が展開されていく中で、自治体の施策にも、起業に関連する事項がみられるようになった。仙台市の場合、起業家育成とビジネス支援、デザイン活用促進事業からなる「東北復興創業スクエア事業」が提起され、せんだい・みやぎ NPO センターでは、「起業家育成事業」の公募に応募し、採択された。センターでは、これまでの経験・人脈をもとに、事業に取り組むことになった。ただし、仙台市の起業家育成事業は、SB に特化したものではなく、いわゆるビジネススクールを念頭においたものであり、そのことは事業受託のさいに、仙台市よりセンターに対して付言されている。

センターでは、起業家育成事業の呼称を独自に「フラスコイノベーションスクール」と命名し、プログラムの策定に取り組んでいる。なお、スクールの名称にある「フラスコ」は、試験管としてのフラスコを想定しており、フラスコに例えたスクールのなかで、受講者に化学反応が起こり、革新的な事業、新たな社会起業家の誕生を願っての命名であった。

スクール事業は 2012 年度内に、3 期に渡って開催された。約 3 ヶ月を 1 クールとし、13 回の連続講座に加えて、個別の起業支援相談会からなるメニューである。参加者定員は各回原則 20 名とされ、計 65 名の受講者に対しての講座が展開された。参加者構成をみると、実施主体が NPO セクターであったこともあり、NPO や市民活動団体の関係者からの応募が最も多く、全体の 32%（19 名）を占めている。ついで、会社員が 18%（11 名）、会社経営者・個人事業主が同じく 18%（11 名）、無職 12%（7 名）、主婦 10%（6 名）、大学生 5%（3 名）、その他 5%（3 名）といった割合であった。なお、男女比率をみると、65 名のうち、22 名が女性の参加者であった。また年齢層は、20 代が 14 名の参加で全体の約 23%、以下年齢順に、30 代が 15 名（25%）、40 代が同じく 15 名（25%）、50 代が 11 名（18%）、60 代以上が 5 名（8%）となっている。

スクールは座学が中心であったが、内閣府による「復興支援型地域社会雇用創造事業」などの創業支援制度を利用した起業が促進されたこともあって、合計 60 名のうち、11 名が年度内に起業することになった。11 名のうち 4 名が、女性起業家であった。

PART 1 チラシ

●フラスコイノベーションスクール PART 2

仙台市受託事業としてのフラスコイノベーションスクールは 2013 年 3 月で終了したものの、2013 年 10 月より、「フラスコおおまち」の入居者であった世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会と SBN の協力を得て、自主事業として「フラスコイノベーションスクール PART2」を開催している。2013 年度は、新たに 15 名の受講者を受け入れての開催となった。そこでは、内閣府による「復興支援型地域社会雇用創造事業」の継続版として、福島・岩手・宮城の各県で実施された助成制度（宮城県の場合、「震災復興起業支援事業」）や中小企業庁の創業助成制度（「地域需要創造型等 起業・創業促進事業」）を活用しながら、起業者の育成・輩出を進めていった。

PART 2 チラシ

●フラスコイノベーションスクール PART 3

さらに、第 3 期となる 2014 年度は、宮城県石巻市での開催を決定し、「いしのまき 6 次化チャレンジセミナー」と銘打って展開した。被災地沿岸部で実施したセミナーでは、応募者が 1 次産業に何らかの関連を持つ事例が多く、テーマに、CB/SB のほか、「6 次産業化」を加え、その実績をもつ株式会社農都共生総合研究所と株式会社東北農都共生総合研究所との共催としている。ここでは 20 名の受講者を受け入れ、講義内で実際に商品開発に取り組み、2015 年 5 月に講座を終えた。

上記のように 3 期にわたって開催してきたフラスコイノベーションスクールでは、合計 100 名の受講者を受け入れることができた。この間、事業の最終報告会を、2014 年 12 月に開催し、一つの区切りとしている。

PART 3 チラシ

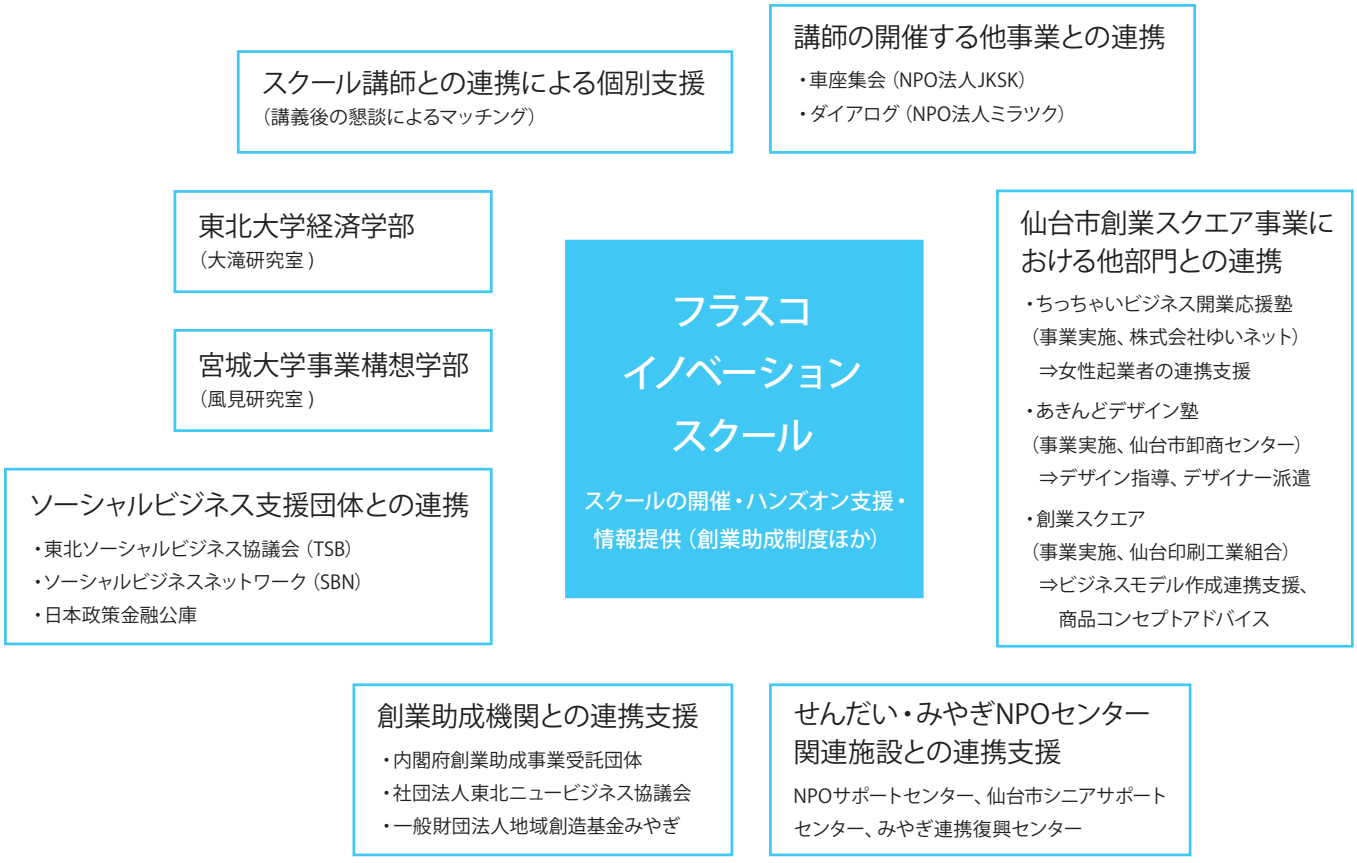
2-3. フラスコイノベーションスクールにおける起業支援スキーム

図 2 は、フラスコイノベーションスクールにおける、受講者への支援スキームである。初年度のスクールは仙台市委託事業であったことから、他の仙台市委託事業との連携が最も活発であった。フラスコイノベーションスクールで学びながら、デザインや WEB の扱い方、さらにはビジネスモデルの作成を、他の仙台市委託事業を合わせて受講することで、学ぶことができるスキームを構築した。また、スクールの講師が運営する他の事業への参加、あるいは大学との連携支援も自然に発生していた。さらに、創業助成金を活用する中で、助成団体からの指導を受けることもあった。

そうした支援の中で、起業者が増え、彼ら彼女らは社会起業家と呼ばれるに至った。しかし、スクールでは、必ずしも起業に固執していたわけではなく、ソーシャルイノベーションという表現を多用したように、何らかの活動・プロジェクトを通して、震災復興を抱える地域に変革を起こす人材の育成に力を注いだ。起業家育成事業においては、起業者数、事業規模と雇用人数等の数字が評価の対象となる。このような指標は重要であるが、震災復興の現場では、数値に現し難いソーシャルインパクトも常に意識して取り組んでいた。復興支援においては、個人が単に事業を起して利益を伸ばしていくというだけではなく、地域のリーダーとなり、周辺を巻き込んでの事業展開が求められていた。少なくとも震災直後の被災地では、利益性のみを論じる風潮はなかった。

支援事業によって誕生した社会起業家は、まさにイノベーターとなり、復興現場で活躍を果たしていった。イノベーションの命名者である、経済学者のシュンペーターは、新しい財や生産方法や製品市場などの要素が何らかの形で結びあわさって、劇的な変化を与えていくことを「新結合」と呼び、これが後にイノベーションと呼ばれるのであって、新しい財や生産方法を生み出す者を「企業家（起業家）」と呼んでいる。そのことからも、震災復興過程で展開された、一連の創業スクール事業は有効であり、単体ではなく、いくつかの支援機関の連携によって、起業者を輩出するスキームは機能していったと考えられる。

図２　フラスコイノベーションスクールにおける支援スキーム連関図



3．東北におけるソーシャルビジネスプラットフォームの構築

以上、第 1 項では東北ソーシャルビジネス推進協議会の活動を、第 2 項では TSB の宮城県協議会の実質運営団体であるせんだい・みやぎ NPO センターにおける「フラスコイノベーションスクール」の取り組みについての検証を行ってきた。ここでは、それらの活動を根底とした東北における SB のプラットフォームの形成動向について述べる。なお、SB のプラットフォームの形成を念頭に、TSB やフラスコイノベーションスクールの活動が実施されたわけではなく、起業家の輩出や SB に関連する事業を実施していくなかで、震災復興の過程における膨大な事業をクリアするためにとってきた対応が、結果的にソーシャルビジネスプラットフォームの形成に近似していったということである。

平時の起業支援でも、連携した支援が重要であり、それがなければ起業家育成はなしえなかったことは「フラスコイノベーションスクール」の事例で述べたところであるが、そうした取り組みの結合が、東北全体のプラットフォームにつながっていったのである。

特に、SBN が実施主体となって、TSB が共催として取り組んだ前掲の SB フォーラム事業の開催は、プラットフォームの形成なしには、なしえなかったことである。なお、この SB フォーラム事業は、震災以前より、経済産業省の構想にあったといわれており、それが東日本大震災の発生により、東北を中心に展開されることになったのである。

このような大規模な事業の開催においては、従来の TSB における、実質運営団体のネットワークによる活動だけでは限界が生じていた。メッセは、2012 年度は福島県福島市、2013 年度および 2014 年度は宮城県仙台市で開催したが、事業で示された出展者や集客の数値目標をクリアするには、ネットワークの再構築が不可欠となっていった。

宮城県の場合、2010 年にみやぎソーシャルビジネスネットワーク（MSBN）が結成され、事業に取り組んでいたが、震災後の活動は休止状態であった。そこで事業の開催にあたって、新たなネットワークの構築が不可欠となっており、震災後に誕生した新たな支援機関に協力を求めなければならなかった。

そこで、新たなスキームとして、名称を「みやぎ SBCB 中間支援会議」とする、仙台市を中心に、宮城県内での CB/SB、あるいはビジネス支援に関わる団体の時限的な連携会議の発足を試みた。参加団体は、SB に限定せず、中間支援的に起業家の輩出を実施している団体・機関に声がけを行い、また、地域のネットワークの拠点となっている団体にも参加の呼びかけを実施し、結果として約 60 団体の賛同が得られている。

東日本大震災の被災地である、福島県、岩手県においても、宮城県の場合と同様に、協議会の強化・新設が実施されていった。福島県ソーシャルビジネス推進協議会、岩手ソーシャルビジネス協議会である。

上記のように、支援者が連携しての支援プラットフォームを形成し、起業家支援だけでなく、その発表の場となるフォーラムの開催、情報交換会の開催を実施し、震災直後における SB 関連事業の要請に応えていったのである。

おわりに

本稿では、SB という概念の東北への浸透過程を、東北ソーシャルビジネス推進協議会の設立経緯、およびせんだい・みやぎ NPO センターにおける SB の取り組みを概観することによって説明したうえで、以下の考察を行った。

まず、東日本大震災後における東北ソーシャルビジネス推進協議会の活動を検討している。東日本大震災以前における TSB 体制の構築は途上であったものの、震災後の SB における需要に対して、一般社団法人ソーシャルビジネスネットワークとの連携によって、事業を展開していたことを明らかにしている。そのさい、各県における協議会は、事業を通して組織の拡大を果たしていた。第 2 に、せんだい・みやぎ NPO センターが、仙台市の委託事業として実施した「フラスコイノベーションスクール」での取り組みについての検証をおこなった。そこでは、仙台市による各種事業との連携によって、独自の支援スキームが形成され、社会起業家あるいは復興過程でのまちづくりの牽引者の育成・輩出を実現していったことを明らかにした。そして第 3 に、上記 2 つの考察から、それらが有機的に組み合わさった格好で、東北におけるソーシャルビジネスプラットフォームの形成の動きに、結果としてではあるが、つながっていったことを考察することができた。

最後に、震災史の視点から、東日本大震災における社会起業家育成事業の経緯を述べておきたい。阪神淡路大震災でのボランティアの活躍をきっかけとして 1998 年に NPO 法（特定非営利活動促進法）が生まれ、2004 年の新潟県中越地震では地域復興支援員の仕組みが全国に広がった。東日本大震災では、社会起業家の存在がそこに該当してくるのであろう。海外へ目向けると、2005 年 8 月にハリケーンカトリーナによる甚大な被害が発生したニューオーリンズでは、復興過程において「起業のまち」と称され、多くの社会起業家が誕生し、活躍していた。それらの延長線上に、東北復興における社会起業家の育成があり、ソーシャルビジネスの導入が図られていったことを付言しておく。

佐々木秀之　SASAKI Hideyuki
フラスコイノベーションスクール・
プロジェクトマネージャー
1974 年仙台市生まれ。岩手大学農学部卒業後、商社勤務・議員秘書を経て、東北学院大学大学院経済学研究科修了・博士（経済学）。東日本大震災後、NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センターに所属し、社会起業家育成事業・復興まちづくり事業に取り組む。宮城大学、東北文化学園大学、非常勤講師。近著『歴史としての東日本大震災』（共著、刀水書房）、『講座東北の歴史』第 3 巻（共著、清文堂出版）、『東北復興ソーシャルビジネス・ケースブック』（共著、ソーシャルビジネスネットワーク）ほか。

2012 年 講師陣

風見正三（宮城大学事業構想学部 教授）

大滝精一（東北大学大学院経済学研究科 教授）

町野弘明（一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワーク事務局長）

北出康博（株式会社電通）

川村志厚（経営デザイン研究所 代表）

稲葉雅子（株式会社ゆいネット 代表取締役）

大志田典明（ブレイントラストアンドカンパニー株式会社 代表取締役）

小出宗昭（富士市産業支援センター 所長）

大和田順子（一般社団法人ロハスビジネスアライアンス 代表理事）

・起業家マインドに触れる

浅見紀夫（株式会社一ノ蔵 代表取締役名誉会長）

・起業家現場訪問

増子良一（イートス株式会社 代表取締役）

鈴木圭介（ミライトス株式会社 代表取締役）

大草芳江（有限会社フィールドアンドネットワーク 取締役）

島田昌幸（株式会社ファミリア 代表取締役）

・オープンセミナー

稲吉紘実（NPO 法人アースアイディンティティ・プロジェクト）

木下 斉（一般社団法人 AIA 代表理事）

加藤徹生（一般社団法人 WIA 代表理事）

・起業支援相談会

川村志厚 (経営デザイン研究所 代表)

庄司和弘（ホライゾンコンサルティンググループ株式会社 代表取締役）

笠間 建（創業スクエア）

2013 年 講師陣

風見正三（宮城大学事業構想学部 教授）

西出優子（東北大学大学院経済学研究科 准教授）

後藤心平（一般社団法人メディア・コミュニケーション教育振興協会 代表理事）

鈴木美紀子（東北環境パートナーシップオフィス EPO 東北）

河野通洋（株式会社八木澤商店 代表取締役）

中野里美（なつかしい未来創造株式会社）

渡邉武海（有限責任事業組合メディア・ストラータ代表）

稲葉雅子（株式会社ゆいネット 代表取締役）

佐々木秀之 (NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター)

菊地竜生（NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター）

・特別講義　トークセッション

宮城治男（NPO 法人 ETIC. 代表理事）

矢島里佳（株式会社和える 代表取締役）

西村勇哉（NPO 法人ミラツク 代表理事）

2014 年 講師陣

風見正三（宮城大学事業構想学部 教授）

川辺 亮 (株式会社農都共生総合研究所 代表取締役)

片岡修一 (株式会社東北農都共生総合研究所 代表取締役)

佐々木美織 (とうほくあきんどでざいん塾 コーディネーター)

佐々木秀之 (NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター)

協力 :NPO 法人石巻復興支援ネットワーク

※役職は当時のものを掲載しております。

編集｜フラスコイノベーションスクール冊子編集委員会
小川真美
小林 奨
佐々木秀之 (編集委員長)
佐藤加奈絵
高尾詩乃
高橋 結 (編集副委員長)
高橋修太

全体監修｜風見正三（スクール総合プロデューサー、宮城大学事業構想学部教授）
編集協力｜川辺 亮 （株式会社農都共生総合研究所、CHAPTER 1 執筆 ）
特別協力｜中西百合（仙台市役所）
ブックデザイン｜渡邉武海（有限責任事業組合メディア・ストラータ）
事業共催｜一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワーク

サスティナブル・コミュニティビジネス
―震災復興型社会起業家育成塾・フラスコイノベーションスクールの軌跡―

発行日｜2015 年 11 月 1 日

発行｜特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センター
〒980-0804　宮城県仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 7 階
TEL. 022-264-1281　FAX. 022-264-1209

公益財団法人世界宗教者平和会議日本委員会
〒166-0012　東京都杉並区和田 2-6-1 普門館 5 階
TEL. 03-3384-2337　FAX. 03-3383-7993

印刷｜株式会社東北プリント

ISBN　978-4-9908429-3-2

MATSUMURA Masako

ISHIKAWA Yohei

SATO Maki

OGASAWARA Naomi

TSUGAWA Noriaki

NAKANO Yumi

KUBOTA Ayumi

ISAGO Yoshihiro

ITO Azusa

SATO Yasuko

IIDA Junki

TANAKA Koki

ARICHI Kazuko

KAMATA Daichi

YOKOYAMA Kenji

ABE Yuigo

HOSODA Yukie

HACHIYA Teppei

MORI Yuma

TOYOSHIMA Jun

MIYAGI Haruo

KAZAMI Shozo

KAWAMURA Shikou

OGAWA Mammie

SASAKI Hideyuki

発行 |
特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センター
公益財団法人世界宗教者平和会議日本委員会